

第14回 中野区ゆかりの著作者紹介展示

芥沢光治良

—中野小滝町に暮らしたエクリバン—



展示期間：平成29年11月25日(土)～平成30年1月25日(木)

中野区立中央図書館

もくじ

| | |
|----------------------------------|----|
| はじめに | 1 |
| 芹沢光治良 | 2 |
| 芹沢光治良を取り巻く人々 | 3 |
| 光治良と家族 | 4 |
| ○藍川清成 | |
| 光治良の信仰 | 6 |
| 光治良と協力者 | 7 |
| ○石丸助三郎○岡野喜一郎 | |
| 学生時代の交流 | 10 |
| ○市河彦太郎○菊池勇夫○有島武郎 | |
| フランス留学・闘病生活 | 12 |
| ○百武源吾○三木清○アンドレ・ジッド | |
| 芹沢光治良今昔 戦前の小滝町から平成の東中野へ | 17 |
| 東中野の家と芹沢光治良 四女・岡玲子氏にきく | 20 |
| 交流のあった作家たち | 22 |
| ○川端康成○大江健三郎○林芙美子○三岸節子○阿部光子○中村真一郎 | |
| 芹沢光治良文学愛好会 | 27 |
| 芹沢光治良 年譜 | 29 |
| 展示風景・展示物 | 33 |
| ブックリスト | 38 |



はじめに

せりざわこうじろう

芹沢光治良（明治 29 年～平成 5 年）は、静岡県沼津市生まれ。

芹沢と中野との関わりは、昭和 6 年に小滝町（現・東中野）に居を構えたことから始まります。戦争の影響で一時期中野を離れますが、昭和 32 年に小滝町に戻ると、以降その生涯を閉じるまで中野の地で執筆活動を続けました。

昭和 18 年に刊行した『ぱり巴里に死す』は、戦後フランス語に翻訳されベストセラーに。さらに、昭和 37 年から刊行が始まった自伝的大河小説『人間の運命』は多くの読者を得ました。また、日本ペンクラブには創立当初から参加し、昭和 40～49 年には川端康成の後を受け会長を務めました。

今なお多くの人々の心に寄り添い、魅了し続けている芹沢作品。この冊子では、経歴や国内外の交流のあった人物の紹介から中野区とのゆかりまで、作家（エクリバン）・芹沢光治良をご紹介します展示の内容をまとめました。

せりざわ こうじろう
芹沢 光治良

明治 29(1896)年 5 月 4 日～平成 5(1993)年 3 月 23 日



▲ 昭和 5 年 作家デビューの頃、自宅庭にて
[提供：芹沢光治良記念館]

作家。静岡県沼津市我入道^{がにゅうどう}生まれ。本名芹沢光治良^{せりざわみつじろう}。十二人兄弟の次男として誕生。幼い頃両親や他の兄弟と別れ、祖父母、叔父夫婦と暮らす。我入道では男子は漁師になる慣習であったが、船酔いのために漁師にはなれず、祖父のすすめる商家の奉公人にもならず沼津中学校へ進学。中学校に新設された行啓記念館の図書室係になり、文学に親しんだ。その後、第一高等学校(東京帝国大学予科)へ進み、大正11年東京帝国大学(現東京大学)経済学部を卒業した。

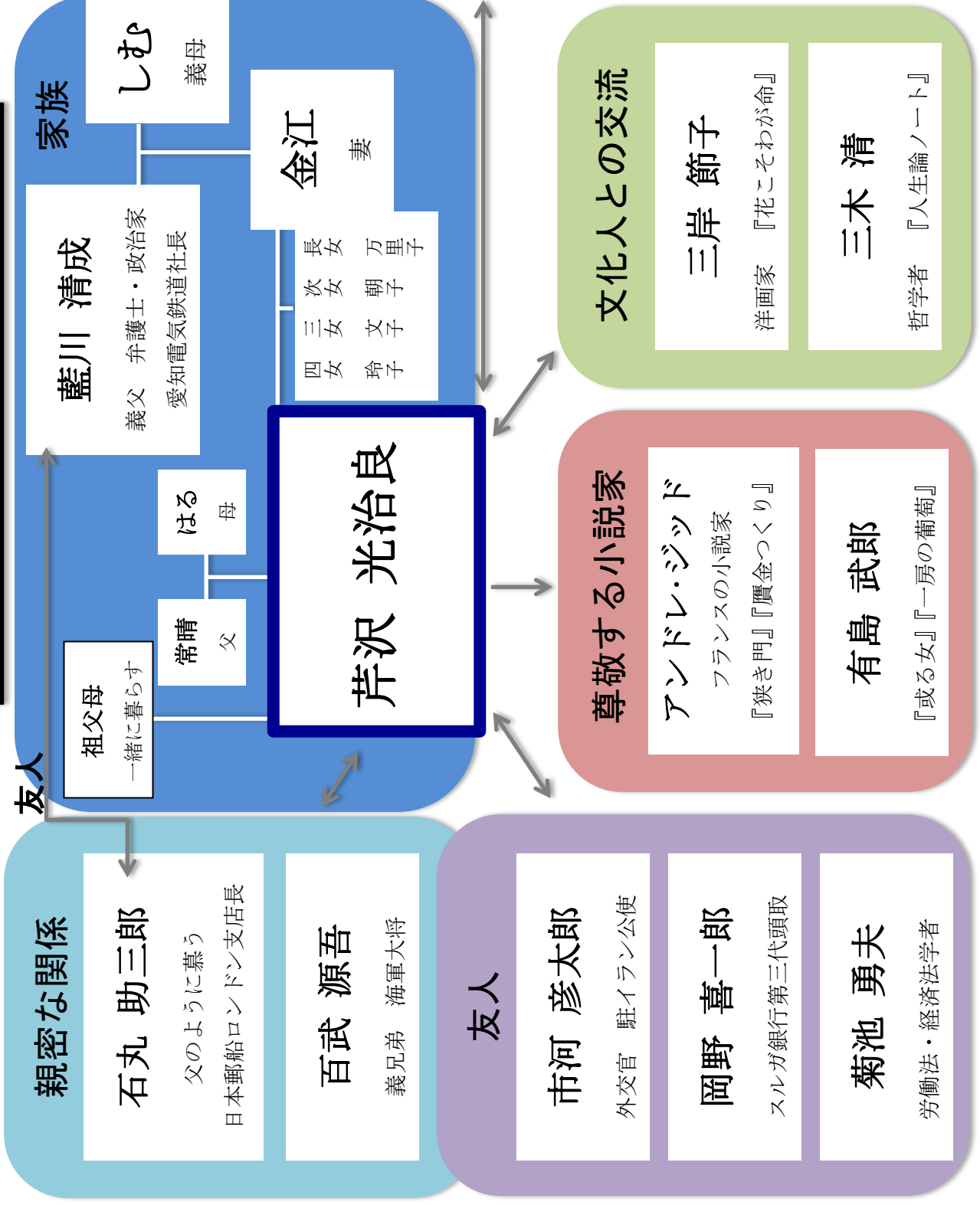
幼い頃から貧困に苦しんだ光治良は、社会から貧困を無くし、世の中の役に立つ人間になりたいと、大学卒業後農商務省に入省するが、思うようにはいかなかった。もう一度自分の可能性を試し、経済について学びたいと留学を希望する。その頃、周囲の勧めにより愛知電鉄社長藍川清成の次女、藍川金江と結婚。大正14年二人でパリに渡り、光治良はソルボンヌ大学に入学する。昭和2年1月、夫婦の間に長女万里子が誕生。しかし3月に光治良が肺炎で入院。その後結核であることが判明し、フランスやスイスで一年間の療養生活を送る。

帰国後、中央大学の講師を勤めながら雑誌『改造』に投稿した『ブルジョア』が、一等に当選。翌年に朝日新聞で連載をもち、講師を退職。以後作家として活躍する。家庭では長女万里子の後に次女朝子、三女文子、四女玲子を授かり、四人の娘の父となる。

昭和 40 年からは日本ペンクラブの会長としても活躍、晩年には「神シリーズ」と呼ばれる作品を一年に一本書き下ろすなど、筆の勢いは衰えなかった。平成 5 年、96 歳という天寿をまっとうし自宅で死去。

昭和 42 年に勲三等瑞宝章、昭和 49 年にフランス芸術文化勲章コマンドール章受章。代表作は『巴里^{ぱり}に死す』『人間の運命』など。

芹沢光治良を取り巻く人々



光治良と家族

大正 14(1925)年 4 月、光治良は愛知電鉄社長藍川清成の次女、藍川金江と結婚した。光治良が父と慕う石丸助三郎と藍川清成は東京帝国大学の旧友であり、しばしば光治良と金江は顔を合わせていた。二人はその後すぐに渡仏、フランスで長女万里子を授かり、のちに日本で三人の娘に恵まれた。

光治良は非常に教育熱心で、ピアノのレッスンに付き添ったり、学習院の父兄会に出席したりしていた。戦争の影響で、四人の娘達が少女時代に読む書物がなくて困ると、光治良は「父親として、何かこころのよろこびを与えたい」と思い、娘たちに読ませるための少女小説を書いた。

また、光治良の姪である星野久美子は、光治良が娘たちを演奏会に連れていく時「子供の頃に親から何もしてもらえなかったんだよ。だから、子供たちにできるだけのことをしてやろうと思っているんだよ」と話していた姿を述懐している。娘たちのことを話す光治良は、心から嬉しげな父親の顔であり、「子供一人一人の才能を暖かく見守り、伸ばす努力をしていた姿は、作家としても、父親としても素晴らしかった」と振り返っている。

光治良は幼い頃から両親や他の兄弟と離れて育ったために、「物心ついた頃から両親にすてられて、生涯一度も、両親から愛の言葉も物的援助も受けたことがないので、親はないものときめていた」と『わが青春』に書き記している。そんな光治良を支えたのは、友人や周囲の大人、そして「家族のためにかげとなり、根のような働きをしていた」妻、金江と二人で築いた光治良自身の家庭であった。



◀ 昭和15年頃、東中野の自宅にて。
右から次女朝子、長女万里子、一人おいて三女
文子、一人おいて光治良、四女玲子、妻金江
[提供：芹沢光治良記念館]

あいかわ きよなり
藍川 清成

明治 5 (1872) 年 5 月 21 日～昭和 23 (1948) 9 月 7 日

光治良の妻・^{かなえ}金江の父。弁護士、政治家、実業家。岐阜県出身。衆議院議員や愛知電気鉄道・名古屋鉄道社長などを務めた。76 歳で死去。

大正 8 年、法政大学に通う息子と女子英学塾（現・津田塾大学）に転入した娘・金江のために東京に家を借りた藍川は、自身も上京の際にはそこに泊まり、東京帝国大学時代の同窓生・石丸助三郎のもとを訪れ、石丸と光治良に子ども二人の監督を頼んだ。藍川は光治良を気に入り、大正 14 年、光治良は金江と結婚した。



▲ 岳父 藍川清成

【提供：芹沢光治良記念館】

昭和 5 年に藍川は、東京帝国大学の同窓生だった^{はまぐちおさち}浜口雄幸首相を応援するため、愛知二区から立候補して衆議院議員になった。その際に東中野駅近くに控家を用意し、光治良一家を住ませた。

昭和 6 年、光治良は中央大学で貨幣論を教えながら朝日新聞に小説を連載していたが、当時は作家の社会的地位が低く見られており、中央大学を辞職することになった。藍川は、婿が作家では他の娘たちの縁談に差し支えるとして、光治良に創作を辞め、結核療養に専念するよう言ったという。

その一方で藍川は明治 28 年、イギリス人が英語で講義していた頃の東京帝国大学英法学科を卒業しており、ヨーロッパの話になれば耳を傾けてくれた。ヨーロッパでは作家は社会的に尊敬されていると説得された藍川は、光治良が小説を書くことを黙認するようになったという。

その後、パリ時代に光治良と知り合い、意気投合して義兄弟の契りを交わした^{ひやくたけげんご}百武源吾海軍大佐から、文明国で作家というものがいかに尊敬されているか熱心に説得されて、藍川も光治良の仕事に信用するようになった。

光治良の信仰

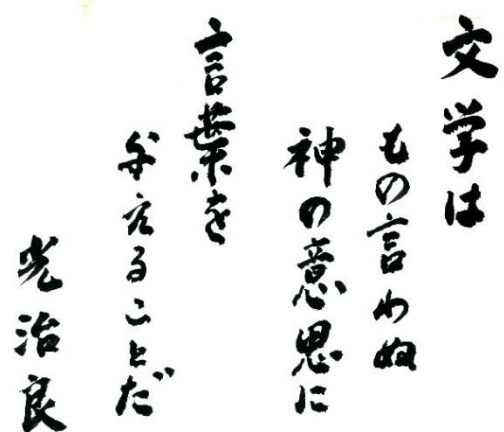
光治良の祖父母や両親は天理教を信仰しており、光治良もその教えの中で成長した。困った時や病気にかかった時などは、神に祈りを捧げて過ごしていた。

作家になってから、信仰に生きた母を題材にした『秘蹟』や、天理教の開祖中山みきを主人公にした『教祖様』などを執筆。また、昭和 61 年から死去する平成 5 年まで、「神シリーズ」と呼ばれる神を題材にした小説を、八年の間毎年一作ずつ書き下ろした。光治良は、小説を書くということは「神の無言の意志に一つの言葉を与えること」という信条をもっており、常に神の存在を意識していた。

「芸術家として死にたいと願う点で、何れの宗派にも属したくない」と主張する光治良にとって、神とは大自然の力であり、固有の宗教を信仰するものではなかった。常に「信仰は立派でも、教団になると宗教は如何におかしい事になるか」という批判精神をもっていた。

光治良の生まれた我入道では、男子は漁師になるのが慣習であった。そのため、光治良が漁師にならずに中学校に進学することは、家族をはじめ周囲の反感を招くことになる。反対を押し切り中学に通っていたある日、乾性肋膜炎にかかってしまう。家を訪れた天理教の会長が、中学を退学し天理教の青年として奉仕すれば病気は治るとすすめたところ、光治良は「はじめて神と対決すべきだ」と、それを断ったという。

平成 5 年 4 月 6 日、青山葬儀所に於いて行われた光治良の葬儀は、生前の本人の希望で、無宗教による音楽葬の形をとった。



文学は
もの言わぬ
神の意思に
言葉き
を与えることだ
光治良

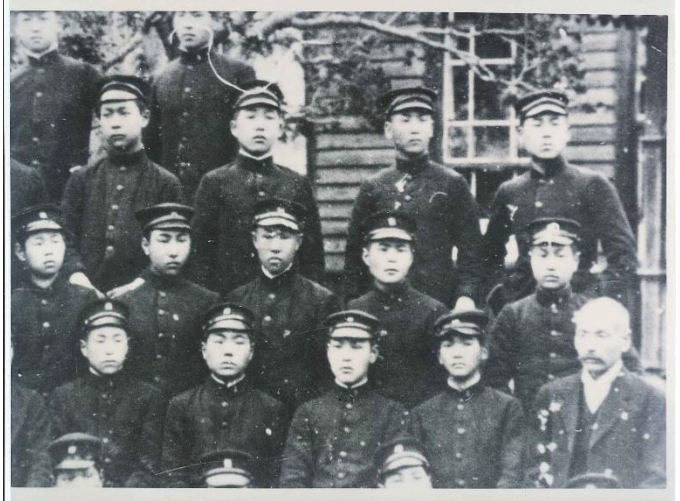
▶ 光治良の書

[提供：芹沢光治良記念館]

光治良と協力者

光治良の祖父は津元^{つもと}(漁業に携わる網子^{あみこ}をまとめる存在)であり、芹沢家は裕福な家庭であったが、光治良が幼少の頃に財を手放し、網子へと転落していた。光治良は弁当の無い日は井戸水で腹を満たすほど、貧困であり空腹であった。

小学校を卒業後、中学校に進み学びたいという気持ちがあったが、当時の我入道の慣習や、家の財力を考えてもそれは不可能であった。しかし、光治良はつてを辿り、兄真一の中学校費用を援助していた横須賀の軍人仁藤金作に学費を援助してもらうことに成功する。中学卒業時には、沼津中学校長の砂崎徳三が男子小学校の代用教員の仕事や、家庭教師の仕事などを世話してくれた。そのおかげで無事に一高に進むことが叶った。



▲ 大正2年ころ 中学4年生。列中央、右から2番目

[提供:中野区立第三中学校]

大学進学時には資産家の緒明圭造^{おあけいぞう}、一高の寮から出て下宿先を探した時には石丸助三郎が手を差し伸べ、大学生活も無事に過ごすことができた。留学先のフランスでは、パリの中流以上の家庭から親戚のように親しく扱われ、闘病を共にした人々とは生涯の親友となった。また、留学中に会った海軍大佐百武源吾とは義兄弟の契りを交わし、光治良を実の兄弟の様に庇護してくれた。

人生の中で多くの人物から助けられていた光治良だが、これは光治良が現状を打破しようと自ら動いた結果であった。そして、面会の希望があれば誰とでも会う時間をつくり、「どんな人をも人間らしく尊重する性格」と、詩人の大岡信^{おおおかまこと}が表現する光治良の人となりによるものであった。

日本近代文学研究者勝呂奏^{すぐろすすむ}は「周囲の人々の厚意や善意による幸運を言うことは容易だが、それをもたらしたのは他ならぬ芹沢の真心からの熱意であった」と評価している。

いしまる すけさぶろう
石丸 助三郎

慶応2 (1866)年 11月～昭和12(1937)年 10月

実業家。佐賀県出身。明治29年東京帝国大学卒業。日本郵船に就職し、ロンドン支店長になる。のちに職を辞し個人で海運業を営む。光治良に「パール(フランス語で父の意味)」と呼ばれ、家の世話、結婚の世話をするなど、精神的にも経済的にも支えた。昭和12年胃癌により71歳で死去。

石丸は沼津に別邸を構えており、光治良が小学校へあがる前の年に、養子に迎えたいという話があったが、石丸側の事情でうまくいかなかった。数年後に再会してからも、石丸は養子にと望んだが光治良はそれを断った。光治良が養子を断った理由は、石丸には既に養子があり、その存在を脅かす事になってはいけないと思うことと、石丸に莫大な資産があったことも、光治良としては面白くなかった、と述懐している。

『人間の運命』の中で、石丸は「田部氏」として登場。光治良は彼に出会わなければ「父の愛を識らないで、冷たく歪んだ性格の男になったかも知れません」と振り返る。沼津にある石丸の別荘を回想した際に、家屋が残っているならば買いとるか借りるかして、一年でも二年でも晩年をそこで過ごし、石丸との思い出に生きたいと言う程、光治良にとって石丸は「この世で会った一人の最も大切な人」だった。

おかの きいちろう
岡野 喜一郎

大正6 (1917)年～平成7 (1995)年

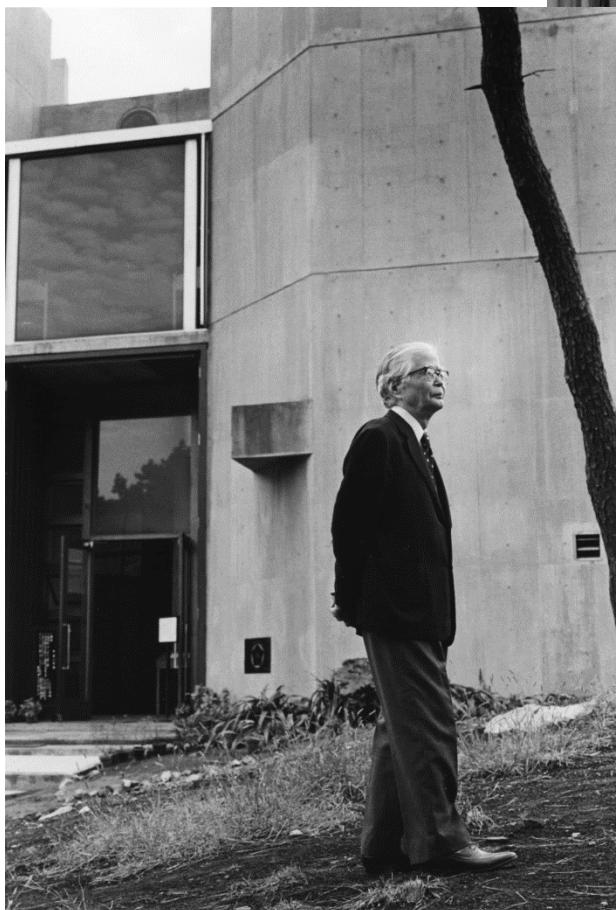
光治良の故郷・沼津でスルガ銀行の頭取を務めた銀行家。光治良の中学の後輩で、芹沢文学館の創立者でもある。78歳で死去。

祖父はスルガ銀行の創設者・岡野喜太郎。102歳で亡くなるまで銀行で働きつづけ、光治良もその生涯を伝記としている(『完全版人間の運命(18)別巻2』所収「岡野喜太郎伝」)。

若い頃から身体が弱かった光治良は、東京帝国大学を卒業して徴兵検査を受けたとき、栄養不良で30歳まで生きられないと軍医に言われ不合格となった。フランス留学時には博士論文の執筆中に肺結核に侵され療養を余儀なくされた。長生きはできないと言われていた光

治良だったが、79歳のとき主治医に、すっかり健康になっていて、肉体も精神も60歳だから、赤子にもどって赤のチョッキを着て還暦祝いをするようにと励まされたという。

その後、岡野から赤のチョッキをプレゼントすると言われ芹沢文学館へ赴くと、チョッキのみならず赤の上着・グレーのズボンに赤のベレー帽まで用意して、市長はじめ多くの知人が集う中、光治良の長寿を祝う祝宴が催された。光治良はあらためて還暦を迎えたつもりでその後も旺盛な創作活動に勤しんだ。



◀ 昭和48年 郷里・沼津市我入道に建てられた「芹沢文学館」の前にて

▲ 昭和45年5月 芹沢文学館開館式 岡野喜一郎と

[提供：芹沢光治良記念館]

学生時代の交流

いちかわ ひこたろう
市河 彦太郎

明治 29(1896)年～昭和 21(1946)年

外交官。静岡県出身。東京大学法学部卒業後、様々な国に赴任した。昭和 15 年にイラン公使に就任。沼津に滞在中、脳溢血により 50 歳で死去。沼津市立図書館には市河彦太郎文庫がある。

光治良とは沼津中学校で同じ文芸部委員に所属していた。光治良が「心の師」と尊敬した有島武郎の「草の葉会」や、作家の林芙美子、平林たい子、城夏子などを紹介したのは市河だった。

2 人が文芸部委員だった頃、『たんぽぽ』という同人雑誌を作った。「作品は（略）読者のところへ翔んでいって、読者の心に作家の精神の種子をまくから」と、市河が名付けた。その後も、赴任した諸外国で必ず日本の文学書の扉に「たんぽぽ文庫」という印を押して、数百冊を図書館に寄贈していた。光治良は市河の早すぎる死を惜しんだ。

きくち いさお
菊池 勇夫

明治 31(1898)年 6 月 21 日～昭和 50(1975)年 7 月 13 日

学者。岩手県出身。ILO（国際労働機関）東京支局員のち九州帝国大学教授。昭和 24 年九大総長となり、九大労働産業研究所長、他に日本労働協会理事、日本法哲学会理事などを歴任。日本学士院会員。77 歳で死去。著書に『労働法の主要問題』『労働法』など。

一高時代に二人は出会い、弁論部へ入部し親睦を深めた。大学では学部が異なったので、毎週土曜日の昼に会い雑談していた。三年生になると高等文官試験を受けようと菊池が誘い、二人で宿を転々としながら合宿し、勉強に励んだ。

別々の道を歩みながらも連絡を欠かさず、お互いに交流を続け、光治良の娘たちにも「素晴らしい小父様」と尊敬されていた。光治良は菊池という友人を得た事を「生涯の幸福」と喜んだ。

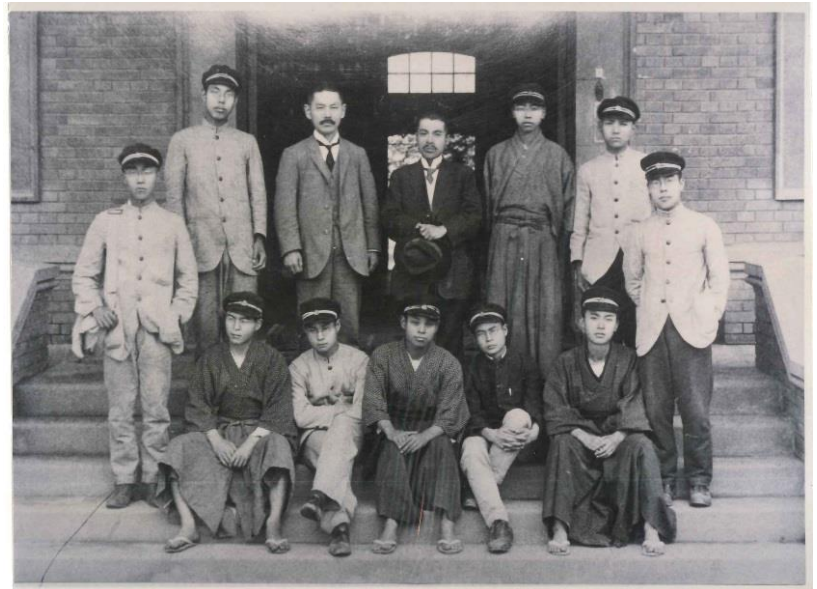
ありしま たけお
有島 武郎

明治 11(1878)年 3 月 4 日～大正 12(1923)年 6 月 9 日

作家。東京都文京区出身。学習院中等科・札幌農学校卒業。東北帝国大農学科大学予科教授に就任。「白樺」同人に加わり作品を発表した。財産放棄や生活改革を考え、狩太農場^{かりぶと}を解放した。昭和 12 年婦人記者である波多野秋子と 45 歳で心中する。著書に『或る女』『生れ出づる悩み』など。

光治良は第一高等学校二年生の時から有島の「草の葉会」に出席するようになった。一高と帝大の学生が十数人集まって、ウォルト・ホイットマンの『草の葉』の講義を聞く会であった。

「草の葉会に行くことによって、父が若いときに財産をすてたことが、たとえ信仰のためとはいえ、偉かったのだと考えさせられるようになった。また、貧しさが恥辱ではなくなった」と記している。光治良は有島を「心の師」として尊敬していた。



▲ 大正 6 年 一高時代、文芸部委員のメンバーと。前列右から 2 人目
[提供：芹沢光治良記念文庫]

フランス留学

大正 11 年、光治良は農林水産省に入省する。官吏をしていけば平穏な一生を送れると保障されていた時代で、誰から見ても順風満帆な生活を過ごしていた。しかし、光治良は自分の人生の先が見えてしまったようで、不満でならなかった。自分や日本をもう一度見なおし、自己を決定したいと、フランスに留学する決意をする。



▲ 大正 14 年 パリの社交界へ出たころの夫妻
[提供: 芹沢光治良記念館]

光治良が留学したのは第一次世界大戦後で、戦勝国であった日本の円の価値が高かった。そのため、フランスで折目正しい社会生活を送ることができ、多くの友人を得ることができた。この環境で自分の可能性の全てを試そうと、音楽、劇場、美術を鑑賞し、文学書も沢山読み、忙しいながらも充実した生活を送った。

ソルボンヌ大学では、大学院というべきオートゼテュード・プラチックのシミアン教授の研究室に採用してもらった。そこで光治良は「貨幣価値の歴史的変化について」の論文を書きあげたが、病に倒れ闘病生活に入る。

闘病生活が終わり日本に戻ると、フランスでの生活を基に『ブルジョア』を書き上げ、日本の文壇にはない異国の文学をもたらした。それから二十年後、戦後昭和 26 年にローザンヌで開催された国際ペンクラブ大会に参加した光治良は、再びパリを訪れた。それまでヨーロッパで暮らしたのは夢だったと、自分で納得させるために、クリスマスカードも出さなかったのが、友人たちは光治良が生きていた事に驚き、喜んでくれた。フランスに滞在した三年間は「私の生涯で最も充実した至福な年月だった」と振り返っている。

ひゃくたけ げんご
百武 源吾

明治 15 年(1882)1 月 28 日～昭和 51(1976)年 1 月 15 日

軍人。佐賀県出身。明治 35 年、第三十期海軍兵学校卒。海軍少尉で戦艦三笠に乗組み日露戦争に参加。昭和 6 年軍令部次長に就任。12 年には大将に昇進。軍事参議官を経て予備役になった後、昭和 20 年九州帝国大学総長に就任。終始日米開戦に反対した。93 歳で死去。光治良はパリ滞在中に百武と知り合い、何度か夕食を共にした後、百武の強い希望で義兄弟の誓いをした。光治良が小説家になった時は真っ先に喜び、作家という仕事を嫌っていた岳父藍川に、作家の仕事を理解するよう熱心に説いた。戦時中、中野署に保護検束された時にも、百武の尽力で釈放されるなど、光治良を庇護し続けた。「この兄こそ、人間のまことで意志を貫き、真の兄弟という幸福を創り出したのだ」と光治良は語っている。

戦後、百武の所在が分からず、光治良は頼まれた地方講演には積極的に参加し、百武を探した。数年かけ日本中の大都市をまわり、ついに昭和 27 年浜名湖の講演会で、百武と再会することができた。その日二人は浜名湖畔の宿で一泊し、お互いに大いに語ったが、百武は「また迎えに行く」とだけ伝え、住所も知らせず宿をたった。その後二人は会う事もなく、百武の訃報を新聞記事で知ることになった。



▶ 百武源吾色紙
[提供: 芹沢光治良記念館]

三木 清

明治 30(1897)年 1 月 5 日～昭和 20(1945)年 9 月 26 日

哲学者、評論家。兵庫県出身。京都帝国大学、マールブルク大学卒業。昭和 2 年法政大学教授になる。岩波文庫創刊に協力。マルクス主義哲学者として注目を集めた。昭和 20 年治安維持法違反容疑で投獄、同年 48 歳で獄死。著書に『パスカルに於ける人間の研究』『哲学ノート』など。

三木は光治良の第一高等学校の先輩であった。パリに留学する際、パリでの勉強についてアドバイスが得られるかもしれないと、光治良から会いに行った。後に「三木さんに会ったことは、巴里生活の一つの成功です」と語っている。

光治良の作品『ブルジョア』について、三木は「好い作品である。じめじめしたところの少しもないのが快い感じを^{あた}興へる」と読売新聞の「文芸時評」欄で評価している。

光治良は昭和 26 年、ローザンヌの国際ペンクラブ大会に出席した後、パリに二ヶ月ほど滞在した。懐かしいパリの町を歩き、セーブル橋からセーヌ河を眺めながら、光治良は二十数年前に三木とカフェでコニャックを飲んだことや、三木の哲学の話聞いたことなどを思い出す。生きていたらハガキなどを送りたいものだがと、三木を偲んだ。

闘病生活

光治良は中学校の頃に発症した乾性肋膜炎^{かんせいりくまくえん}を治しきれなかった事が原因で、フランス留学中に肺結核に侵されてしまう。当時の日本では伝染するばかりでなく、不治の病として扱われていたが、フランスでは千メートル以上の高原で自然療養をすれば、必ず治ると考えられている病だった。

昭和2年、光治良はスイス寄りの高原療養都市オートビルにある、主に大学生と知識人のための療養所に入院。療養所と言えど、豪華な明るいホテルのようであった。ホテルと違うのは、院長の作った時間表にそって散歩や安静などの闘病生活を送らなければならないところであった。

光治良は病気になるまで死への恐怖は抱いていなかった。しかし、肺結核という死ぬかもしれない病気に罹り、「自分の中の可能性がすべて無になることの悲しみ」を感じる。そして、今までは人の役に立ち、世の中を良くしていきたいとの考えをずっと持っていたが、「自分の喜びのために生きなくて、このまま死んでどうする」という思いを抱くようになった。

また、この時共に闘病生活を送ったフランスの科学者ジャック・シャルマンに言われた「なぜ文学をしないか、そのためにお前は結核になったのだぞ」という言葉が心に響いた。他の闘病仲間達にも応援され、文学の道を歩むことを決意する。光治良にとって、スイスでの闘病生活が、その後の人生を決めたといえる。

日本に帰ってからも医師の言いつけ通り、散歩や高地での安静、絶対療養などの闘病を続けた。戦後重い喘息^{ぜんそく}を患った時期もあったが、96歳で死去するまで、現役の作家であり続けた。



▲ 昭和3年ころ 療養所でのキユール（ペランダで安静にし、外気を呼吸する療法）をする光治良

[提供：芹沢光治良記念館]

アンドレ・ジッド

明治2（1869）年11月22日～昭和26（1951）年2月19日

フランスの作家。代表作は『狭き門』や『贖金づくり』など。既成の道徳に背を向け人生の価値を表現することに尽力し、1947年ノーベル文学賞を受賞。81歳で死去。

経済学研究のためにフランスへ留学した光治良は、経済学者シャルル・ジッドと出会う。シャルルは後のノーベル文学賞作家アンドレ・ジッドの伯父であった。

アンドレ・ジッドの小説を、光治良はパリに着いた頃に知った。はじめフランス語の教科書として『狭き門』を読んだときには面白く感じられなかった。しかし肺結核を病み、フランスやスイスの高原で療養しているときに読んだジッドの小説に、光治良は深い感動を覚えた。療養中、日に一冊のペースで小説を読んでいた光治良にとって、小説は「スイスの自然が生き戻った命に新しく与えた同じ歓喜」を与えてくれるものだった。その読書の中で出会ったのが、アンドレ・ジッドの『背徳者』だった。全身が顫え、読後には数日間熱を出すほど感動したという。

闘病生活の中で死から逃げようとするのは、生命や神について考えることにつながった。光治良は、キリスト教徒でも天理教の信者でもない自身にとって神とは何であるかを自分に問いかけていた。ジッドは敬虔なカトリックの信者だった母や妻とは同じ信仰をもたず、不道徳とさえ呼ばれることもあったが、その作品の根底にあったのは、「高貴な精神」とも言うべきものであったと光治良は述べている。

後にシャルル・ジッドの紹介でアンドレ・ジッドと対面したとき、光治良は緊張のあまりほとんど喋ることができず歯がゆい思いをしたという。

芹沢光治良今昔 戦前の小滝町から平成の東中野へ



昭和13年頃の東中野駅北側

『中野区詳細図 大東京区分図三五区之内』

小滝町転居前昭和3年～6年5月、芹沢一家は新宿区上落合206に住んでいた。当時の落合は落合文士村とも呼ばれる作家の集合地帯で、交友のあった中では、林芙美子宅や、記者の兄真一宅などがあつた。後年、戦中の日記にも頻繁に「落合へ行く」と出てくる。



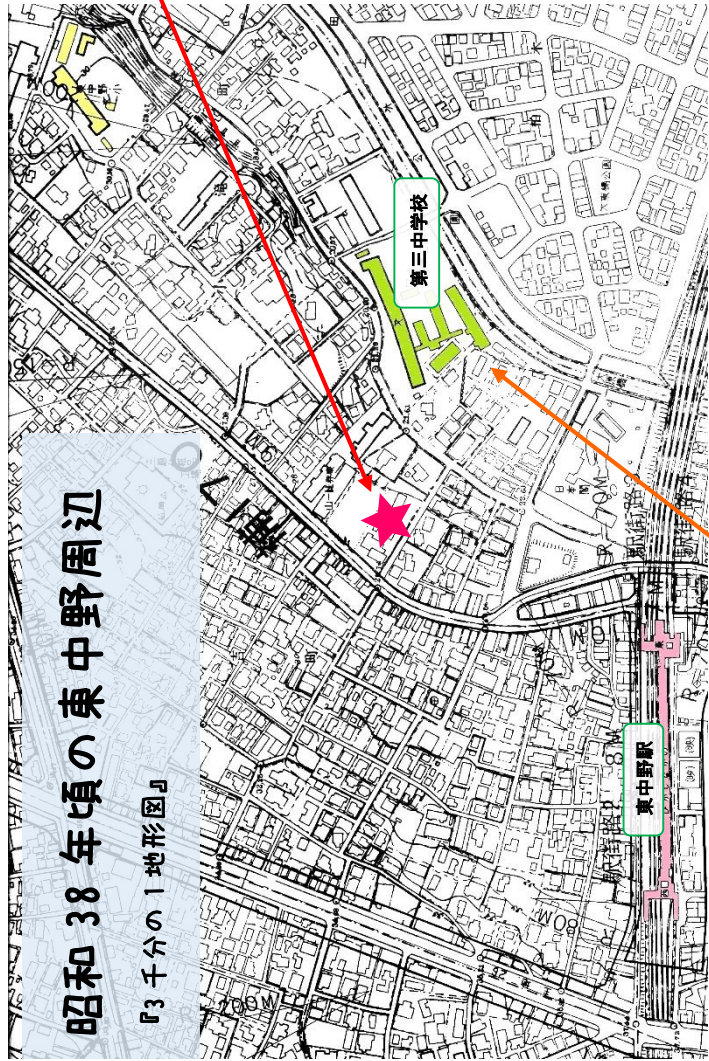
▲ 昭和6年頃 ありし日の自宅。 [提供: 芹沢光治良記念館]

自宅は東中野尋常小学校近く、岳父藍川清成が建てた高台の洋館で、ご家族のお話では、青と煉瓦色だったという。昭和20年5月25日の空襲にて倉庫を残して全焼した。芹沢一家には疎開先の軽井沢星野の山荘で耳に届いた。

『芹沢光治良戦中戦後日記』(勉誠出版, 2015)によれば「5月27日(略)小滝から何か知らせがありましたか、昨日親類の者から電話で、25日朝の空襲で焼けて、人形の頭がころけていたざりだということですと言った。この言葉に僕は胸をつかれた。金井さんは家の下隣で、金井さんが焼ければ僕の家が焼けない筈はない。(略)家の者共も小滝の知らせで茫然とした」

戦後しばらくは世田谷区に住んでいたが、昭和31年旧居跡に自宅を建て直し再転居、代表作『人間の運命』ほか多くの作品がここで生み出された。

- ▶ 昭和31年頃、建て直し前の自宅跡に佇む芹沢光治良。背景に集合住宅と、遊ぶ子どもが見える。この集合住宅は、昭和33年の住宅地図では、山一證券のアパートとなっている。
[提供：芹沢光治良記念館]

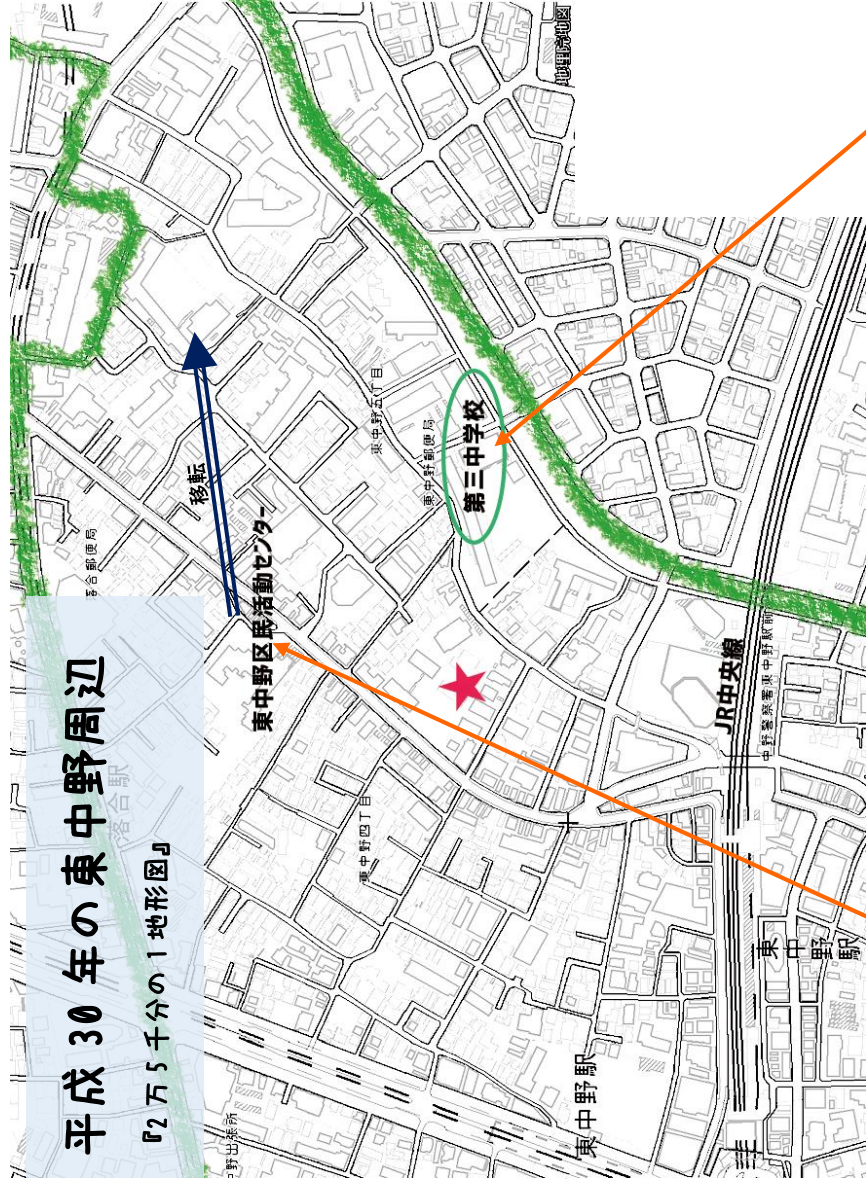


戦前には東中野尋常小学校があった場所。空襲で焼けて小学校が陸校になったところへ建て直し、第三中学校となった。芹沢宅の近所であるため、文学少年の生徒からファンレターをもったり、芹沢が生徒宛の色紙を書いたこともあったりと交流があったという。



地名の話

駅や小学校の名前には戦前から東中野と使われているが、地名として東中野になったのは昭和41年住居表示実施時のことである。それ以前はこの、中野区の線路沿い北側東端の地域は「小滝町」といった。『中野区史』によれば「東の方に堰があり、流水が小瀑布となって涼々（そうそう）の音を絶たなかつたのでこの名があった」とのこと。現在は神田川にかかる小滝橋や、新宿区の小滝橋通り、小滝公園に名が残っている。



晩年に至るも『神シリーズ』を一年に一作書き下ろす旺盛な執筆活動を続けていた芹沢光治良は、平成5年、生涯現役を通して自宅で亡くなった。現在の芹沢邸は四女の岡玲子氏の主宰するサロンマガノリアとなり、月1回催しが行われている。

▼ 芹沢光治良記念文庫入口



昭和52年7月設立の芹沢光治良文学愛好会の活動場所。55年6月からは芹沢本人も参加した。既に80を越えていた芹沢は自宅から車で送ってもらっていた。現在も芹沢光治良文学愛好会の月例読書会が行われている。区民活動センターの建物は平成30年6月、平成21年に閉校した東中野小学校の跡地に移転する。

芹沢光治良生誕100年の平成8年、第三中学校校内に芹沢文庫が開設された。見学は予約制。平成30年3月をもって閉校し、4月に第十中学校と統合開校、更に翌々年度には十中の場所に新築移転予定。

東中野の家と芹沢光治良 四女・岡玲子氏にきく

芹沢光治良一家が東中野に住み始めたのは、昭和6年のこと。武蔵野の面影がある時代だった。当時の家は昭和20年5月25日の空襲で焼けてしまったが、昭和31年に同地に帰還する。

——帰ってこられたときはいかがでしたか

「初めて東中野に越してきたころは牛が歩いていたり、そして、戦争で焼けるまでは欒並木で、バスのロータリーがあり、広々とした東中野でしたが戦争後十年して戻ってきて、その変化に大変びっくりしていた様子でした。でも、昔からの商店が何軒もあって『ああ、帰ってきた！』という感激があったようです。特に、母は実父が選んだ土地ですので、すごく喜んで戻ってきた日には、昔の顔なじみの場所へ『帰ってきましたよ！』と歩き回りました。戦後十年たって、ようやく仮住まいから自分の家へ戻れた、戦争が終わった、懐かしい東中野へ戻った喜びでいっぱいだったことでしょう。それから、三十年以上この場所で父は生活できてよかったと思います。」

——その後の変化はいかがですか

「今は日本閣のところに高層ビルが建ち、住んでいらっしゃる方も変わりましたが、商店街に梅屋さんという酒屋さんがあって、父が散歩の途中よく話すため立ち寄った店でしたがコンビニになり、床屋さんも本屋さんもなくなっていました。今、母がいたら悲しんだことでしょう。」



▲ 戦前の旧東中野自宅前 [提供: 芹沢光治良記念館]



▲ 昭和29年頃の東中野駅

[提供: 中野区]

——芹沢先生ご存命の時代から残っているものはありますか

「家の前の坂を上がって落合方面右の駐車場

に古い^{けやき}樫が一本残っていますが、その樫が父の作品の中にでてきます。樫はそのまま残されていていいですね。道の感じも変わっていませんし、東中野のこちら側の駅舎はそのまま、私はいつも我家へ帰るとき、階段を下りると『無事に帰ってきた』とホッとします。」

——**芹沢先生と交流のあった方々で、今回紹介している以外に、岡さんが印象深い方はいらっしゃいますか**

「私がピアノを教わっていた安川加壽子さん（※ピアニスト、1922～1996）と父は、父がレッスンに付いてきた関係で面識があり、互いに尊敬しあっていました。ご主人の安川定男さん（※国文学者、1919～2007、おうふう発行の2004年の著作『楽の音に魅せられた魂』に芹沢論もあり）は有島武郎の研究者で、ご主人としても学者としてもすばらしい方でした。」

——**資料を確認していると芹沢先生はいろいろな方から慕われていらっしゃいますが、芹沢先生の魅力はどこにあると思われますか**

「父は一言二言話すと父の誠実さがでてくるのでしょうか？ どんな方とも外国の方とも親しくしてもらえる、そんな性格を持っていました。いつでも真心こめて相手に接して、相手の話をよく聞いていたと思います。そんな父に身の上相談に来られた方もいたようで、助言もしたようですが、父は、色々な方達からのお話を一心に聞いて、小説を書くヒントを頂戴していたと思います。」

皆さんの話されるそれぞれの喜び、悲しみ、興味、悩み……を一緒に感じ、考え小説の中へ運んでいったのでしょうか。父方の祖父の影響でしょうね。助けるために自分もその立場になって教える、そういう遺伝子を持って生まれたんでしょう。母方の祖母も、戦時中兵隊さんを見送りに行って病気になって亡くなった施しの人で、その遺伝子を母も継いでいたと思います。」

——**岡さんから見た、ご両親はいかがですか**

「父は私がピアノを弾いていると機嫌がよく、今でも練習さえしていれば父がなんでもやってくれるような気がします。母は最期まで自分のことは自分ですという、信念の本当に強い人でした。生い立ちが全く違うカップルで、両極端に二人とも強い人だと思っています。老年になると助け合って、父親が病気をすると、母が一晩中さすってあげて空気が行くようにしていました。母の方が先に亡くなりましたが、当時の父の様子を思うと、明治時代の模範的なカップルだという気がします。ハッピーエンドでしたね。」

交流のあった作家たち

かわばた やすなり
川端 康成

明治 32(1899)年 6 月 4 日～昭和 47(1972)年 4 月 16 日

作家。大阪府三島郡出身。15歳で孤児となる。日本人初のノーベル文学賞を受賞。昭和23年から日本ペンクラブ会長をつとめ、昭和33年には国際ペンクラブ副会長に推されるなど、国際的な作家として活躍したが、昭和47年4月に72歳でガス自殺をした。著書に『雪国』『伊豆の踊り子』など。

光治良は川端との出会いをこう記している。『失恋者の手紙』を読んだとて、一年下の寮生の川端康成君が、部屋に訪ねて来て、自分も作家志望だと告げて、散歩に誘った。それから二人はよく、貧弱な軀を、黒のマントーでおおって、本郷通りを一緒に歩いたものだ」光治良の目に映る川端は、目の大きな都会の青年であり、彼と比べると自分は「貧しく野蛮人のような田舎者」だったとしている。そうして川端の出入りの下町の喫茶店で、コーヒーをおごってもらったりしたようだ。

川端が日本ペンクラブの会長をしていた十七年間、光治良は副会長を務め、昭和40年川端の推薦で会長を引き継いだ。

光治良は「同時代に生きた作家で、川端さんは唯一真似のできない天才」だと感じており、葬儀委員長も務めた川端の死については、自殺ではないと断言している。



◀ 昭和 32 年 9 月 世界ペンクラブ東京大会に来日する人たちの出迎えに、川端康成（中央）と

[提供: 芹沢光治良記念館]

おおえ けんざぶろう
大江 健三郎

昭和 10(1935)年 1 月 31 日～

作家。愛媛県出身。『死者の奢り』で作家として認められ、国際的作家として活躍。平成6年に日本人としては二人目となるノーベル文学賞を受賞。著書に『万延元年のフットボール』『河馬に噛まれる』など。

光治良と大江はペンクラブで川端に紹介されて付き合いが始まった。ある時光治良は、長く愛用していた万年筆のせいで、右手の指に不調をきたした。そこでボールペンを使うことにしたが、どれも光治良には細く、そのことを本に書いた。すると、本を読んだ大江が太めのボールペンをプレゼントし、光治良はその気遣いにととても感謝した。

大江は光治郎を「日本の文壇人屈指の知識人」と尊敬しており、光治良にとって大江は「現代の日本の作家で、最も信頼する」人物であった。

はやし ふみこ
林 芙美子

明治 36(1903)年 12 月 31 日～昭和 26(1951)年 6 月 28 日

作家。山口県出身。さまざまな職を転々としながら、作品を発表。昭和 5 年刊行の『放浪記』はベストセラーになった。戦時中は従軍作家として、中国、満州、朝鮮に行く。戦後も作家として活躍したが、持病と過労とで 47 歳で急逝。中野区にある萬昌院功運寺ぼんしょういんこううんじに眠る。著書に『晚菊』『稲妻』など。

光治良はパリからの帰国後、友人の市河彦太郎の紹介で芙美子と出会った。お互いに住んでいる場所が近かったため、芙美子は芹沢家に立ち寄ると酒を飲み、光治良も散歩の途中で芙美子の家の開いている窓を見つけると下から声をかけたりした。

芙美子は創作の秘密を手放しで話したり、文壇人と酒の付き合いをするように勧めるなど、同じ作家の立場から光治良と親睦を深めた女性だった。

しかし、いくら文壇人との付き合いを勧めても、光治郎は実行に移さず、次第に忙しさも加わり芙美子は光治郎と距離を置くようになる。光治郎もまた、芙美子のその親切が、或る場合には迷惑に感じられた。

ある時、女流作家の葬儀で二人は久しぶりに会ったが、芙美子は五百坪もの土地を買うように熱心にすすめ、その話しぶりに、光治郎はもう以前の芙美子ではないと思い、それきり会わなかった。



▶ 昭和 10 年頃 左列 3 人目林芙美子
[提供: 芹沢光治良記念館]

みぎし せつこ 三岸 節子

明治 38 (1905) 年 1 月 3 日～平成 11 (1999) 年 4 月 18 日

愛知県出身の洋画家。大正 10 年に 16 歳で上京し洋画家・岡田三郎助おかださぶろうすけに師事して油絵を学ぶ。その後、大正 13 年に女子美術学校 (現・女子美術大学) を卒業し画家・三岸好太郎みぎしこうたろうと結婚した。昭和 9 年に好太郎が死去した後も洋画家として精力的に活動し、フランスと日本で絵を描きつづけた。平成 6 年に文化功労者。平成 11 年に 94 歳で死去した。

光治良が三岸の作品に触れたのは昭和 9 年の独立美術展でのことだった。光治良は三岸を「絵筆をもって自然や人生や己れの魂を語る詩人」と評している。戦後には連載小説『命ながし』の挿絵を三岸に依頼した。

光治良が初めて三岸に会ったのは『命ながし』の連載が終る昭和 22 年、新橋の料亭でのことであった。三岸は「毎回涙をこぼしながら挿絵を描いた」という。それ以来、お互いの作品を鑑賞するようになった光治良と三岸は、芸術家仲間として親しくしていた。光治良は三岸の絵画に対する態度に励まされる思いだった。「なにを描くべきかわからないながらも一層けわしい世界に挑みつづけることだけが生きるしるしであろう」という三岸の姿勢に、光治良も奮起して創作に取り組んだという。

あべ みつこ 阿部 光子

大正元（1912）年 12 月 25 日～平成 20（2008）2 月 26 日

作家・牧師。夫はキリスト教団救世軍の牧師・山室武甫。佐佐木信綱に師事し国文学を学び、作家、牧師として活動した。96 歳で死去。

名古屋新聞（現・中日新聞）の小山松 寿社長の長女と高等女学校で同級生だった阿部は、『ブルジョア』を発表したばかりの光治良と知り合ったとき、気鋭の新進作家として活躍する光治良を近寄りがたく思ったという。その後、光治良の長女・万里子の勉強相手として東中野の芹沢家を訪れるようになった。

光治良は若手作家の原稿に感想を求められることも多かった。初めて光治良が他人の原稿を読んだのは阿部のものだったという。光治良は他の作家の原稿を読む際の条件として、添削や出版社への紹介はしないことを挙げていた。作家は自力で作家になるべきであるというのが光治良の信念だった。

何年にもわたって光治良のもとに原稿を持ち込みつづけた阿部だが、なかなか作家としてデビューできずにいた。光治良はそのことに責任を感じて知人の同人雑誌に阿部を紹介し、数本の短編が作家・片岡鉄兵に評価された。その後、阿部の作品は『三田文学』や『文学界』に掲載され、芥川賞の候補にもなった。

結婚と第二次世界大戦のために苦労を重ねた阿部は、それでも小説を書くことをやめなかった。その後、昭和 39 年に「遅い目覚めながらも」で阿部は田村俊子賞を、昭和 44 年に同名の短編集で女流文学賞を受賞している。

なかむら しんいちろう
中村 真一郎

大正7（1918）年3月5日～平成9（1997）年12月25日

東京市日本橋区（現・中央区）出身の作家、評論家。東京帝国大学仏文科在学中に堀辰雄^{ほりたつお}に師事。フランスの作家マルセル・プルーストと源氏物語への深い造詣を背景として創作活動を行なった。代表作は『この百年の小説』や『蠣崎波響^{かきざき はきょう}の生涯』福永武彦^{ふくながたけひこ}と堀田善衛^{ほったよしえ}との共作『発光妖精とモスラ』^{ほんだいしろう}（本多猪四郎監督の映画『モスラ』の原作）など。79歳で死去。

戦前には光治良のもとを訪れる作家志望の学生がたくさんいた。その中のひとりに、旧制第一高等学校時代の中村真一郎がいた。中村は友人とともに光治良を訪ねており、その際に光治良は、書くことが好きで毎日六枚（光治良の没後に中村が書いた回想では「三枚」）の原稿用紙を書けなければ小説を書こうとするなど語ったという。中村は書くことが好きでいくらでも書くことができたので初志貫徹し作家になったと述懐している。

この逸話は中村の随想集によるもので、後年これを読んだ光治良は「心に汗をかいた」という。光治良は自身が出会った一高生や帝大生たちの中に中村がいたことを記憶していなかった。当時の文学志望の学生には「書きたいことはあるがあえて書かない」と怠惰を自慢する者もいた。そのため光治良は毎日書き続けることの大切さを語ったのであろう。

芹沢光治良文学愛好会

芹沢光治良文学愛好会について

昭和 52 年 7 月 17 日、沼津にある芹沢文学館（現・沼津市芹沢光治良記念館）の「友の会」のメンバーで、地域的なつながりが持てる会を作ろうと、中野サンプラザにおいて「芹沢文学館・東京友の会」が発会した。当日サンプラザの研修室には三十二人が集まり、光治良の講話をもって発会式となった。そして翌 8 月に「芹沢文学研究会」という月例読書会が発足。昭和 56 年 8 月に多くの読者が気軽に参加できるようにと「芹沢光治良文学愛好会」と親しみやすい名称に変更した。

愛好会は国籍、性別、年齢、読書量に関係なく、誰でも自由に参加できる。毎月行われている月例読書会や、会員同士によるリレー随筆のほか、忘年会、新年会、光治良ゆかりの地を巡る国内や海外への旅行、公演会、コンサートなど、幅広い活動を行っている。平成 28 年 7 月にて、愛好会は創立 40 周年を迎えたが、月例読書会は一回の中断もなく継続している。



▲ 芹沢文学愛好会にて

[提供：芹沢光治良記念館]

愛好会と光治良

昭和 55 年 6 月から、光治良も愛好会の月例読書会にほとんど毎回参加していた。参加する時は 13 時から 17 時の会の時間のうち、15 時から出席。作品についての意見や感想などを聞き終わったあと、自ら作品を語ったり、質疑応答を行っていた。軽井沢に避暑に行っている 8 月から 9 月の夏の間と、雪が降る時以外は必ず参加しており、出席する際は三女の文子が車で送迎をしていたそうだ。

光治良晩年の著作、神シリーズの第一巻である『神の微笑』にも愛好会について書かれて

いる。「いつも三、四十人集って、実に真面目な、いい会であった」「会を重ねるうちに、会員と親しくなり、名前はもちろん、そのお人柄や職業なども、自然にわかって、いつか僕自身、その会合を楽しむようになった」という風に、愛情をもって愛好会を見ていた事が伝わってくる。

森次郎文庫について

芹沢光治良文学愛好会代表の鈴木春雄氏は、『人間の運命』を読んでから芹沢文学にすっかり魅了されてしまった。お金の続く限り本を買い続けようと、一時は「芹沢光治良」という五文字が入っていれば、広告に名前が載っているだけでも集めていたという。

平成3年4月初旬、自宅に増築した芹沢文学専用書斎に蒐集本を収蔵・展示し、光治良の三女文子に報告した。それを聞いた光治良は、その書斎を『人間の運命』の主人公である森次郎、即ち「森次郎文庫」と命名したいと申し出る。

鈴木氏は同じ作品でも発行年数や版が違うものなど数種類集めている。例えば同一の本、同一出版社で装丁、ページ数まで同じであっても戦前の昭和9年に刊行された本と、戦中の昭和17年に刊行された本では紙の質が違い、手に取るとその重さの違いが分る。「本そのものが時代を物語っている。この文庫の中ではそういった時代背景を感じ取ってもらえたら」と語る。

光治良の作品は「純粹無垢というか人道主義的な心のありよう、人間の尊厳の様なものを訴えかけてくる」もので、そんな芹沢文学と「波長が合った」のだという。また、決して人を侮辱するようなことは書かないところも「まとめるのが難しいであろう文壇の世界で、9年間も会長を務められた理由ではないか」と話す。

今後の森次郎文庫については、来館した人々に見やすい様に本の整理をして、本自体をパラフィン紙などで保護し、保存につとめていきたいと語った。

芹沢光治良 年譜

| 年号 | 年齢 | 出来事 |
|---------------------|-----|---|
| 明治29 (1896)年 | 0歳 | 5月4日 静岡県駿東郡楊原村我入道1番地に、常蔵（後、常晴に改名）、はるの十男二女の次男光治良（みつじろう）として生まれる。 |
| 明治33 (1900)年 | 4歳 | 両親は天理教の沼津連合集談所に入り、無所有の伝道生活を始め、光治良は祖父母・叔母の家に預けられる。 |
| 明治36 (1903)年 | 7歳 | 養子になる話が三回あり、その中に後年父親のように慕った石丸助三郎もいたが、結果的にまとまらず。 |
| 明治37 (1904)年 | 8歳 | 4月 楊原小学校に入学。 |
| 明治40 (1907)年 | 11歳 | 強制的に漁につれ出されたが、激しい船酔いのため漁師にならず、担任の勧めで進学の方を持つ。 |
| 明治42 (1909)年 | 13歳 | 10月5日 祖父常吉死去。 |
| 明治43 (1910)年 | 14歳 | 3月 楊原小学校卒業。 4月 叔母とみの夫で海軍の軍人仁藤金作から学費の援助を得て静岡県立沼津中学校〔現、沼津東高等学校〕を受験し、百人中三番の成績で入学。 |
| 明治44 (1911)年 | 15歳 | 2月 文芸部委員に選ばれる。 3月 『学友会報』に「夜の帰り道」と題する作文を掲載。 2年生西級の副級長を務め特待生となる。以後、卒業まで特待生となり、授業料が免除となる。 |
| 明治45・大正元 (1912)年 | 16歳 | 6月 『学友会報』記念館記念号に「記念館 心のひゞき」と題する作文を掲載。 絵画担当教師前田千寸（ゆきちか）に啓発され、フランス文学に憧れて『白樺』を読む。 |
| 大正2 (1913)年 | 17歳 | 2月 学芸部委員に選ばれる。市河彦太郎、橋爪健、北川三郎等と共に回覧誌を出す。 4月 乾性肋膜炎を患う。 |
| 大正3 (1914)年 | 18歳 | 2月 文芸部委員及び学友会幹事に選ばれる。 3月 『学友会報』に修学旅行の短歌二首を掲載。 |
| 大正4 (1915)年 | 19歳 | 3月 『学友会報』に「卒業間際に」と題する作文を掲載。 3月 学力優等者、在五年精勤者、本学年精勤者として静岡県立沼津中学校を卒業。 4月 沼津町立男子小学校（現、沼津市立第一小学校）の代用教員となる。後、沼津中学校校長砂崎徳三の紹介で、原町の植松家の家庭教師となる。 |
| 大正5 (1916)年 | 20歳 | 9月 第一高等学校文丁（仏法科）に入学。一年間の寮生活を送る。 |
| 大正6 (1917)年 | 21歳 | 夏休暇が終わり、上京する列車で、石丸助三郎と再会する。 市河彦太郎の紹介で、有島武郎の「草の葉」会に参加し谷川徹三を知る。 経済的に寮生活が困難になり、家庭教師や翻訳のアルバイトをしながら通学する。後に砂崎徳三から東京の実業家、安生慶三郎を紹介され、末子夫人から授業料の援助を受ける。 |
| 大正7 (1918)年 | 22歳 | 3月 文芸部委員に推薦され、『学友会雑誌』に処女作「失恋者の手紙」を掲載。好評を得て、1年後輩の川端康成との交流が始まる。 この頃、学費の援助を受けた安生慶三郎の令嬢鞠子を知り、手紙の交換を始める。 フランス語の教授石川剛と、メリメの長編『危険な関係』の共訳をしたが出版には至らない。 徴兵検査を受け丙種判定となる。 |
| 大正8 (1919)年 | 23歳 | 2月 品川御殿山の緒明主造の貸費生となり、卒業までの学費の目処がたつ。 7月 文芸部委員を辞任。第一高等学校卒業。 9月 東京帝国大学経済学部に入學。助教授の糸井靖之のゼミでフランス実証主義社会学（経済学など）を学ぶ。 麻布区広尾町5の石丸助三郎宅に身を寄せる。 |
| 大正10 (1921)年 | 25歳 | 4月～8月 高等文官試験の受験勉強のために菊地勇夫と共に合宿。 9月 筆記試験。 10月 口述試験。高等文官試験行政科に合格。 |
| 大正11 (1922)年 | 26歳 | 3月 東京帝国大学経済学部卒業。 4月 農商務省に入省、山林局を経て農務局農政課に勤務。 職場でドイツ語の必要を感じ、東京外国語学校夜間部に入学しドイツ語を学ぶ。 |
| 大正12 (1923)年 | 27歳 | 5月 安生鞠子がドイツへ留学。頻りに手紙をやりとりするようになる。 6月 文学の師と仰いでいた有島武郎が情死。 7月 石丸邸が完成し同居する。 7月 祖母くめ死去。 |
| 大正14 (1925)年 | 29歳 | ドイツに留学していた安生鞠子が医学生と婚約し、失恋。 3月 学者となるために留学を決意し役所に辞表を出す。休職の扱いを受けることになる。 4月 石丸の勧めで、愛知電鉄社長藍川清成の次女金江と結婚。 6月10日 フランスのマルセイユ港へ向けて出航。 大学入学までの準備中、パリのレストランで食事をしていた海軍の滞任武官、百武源吾と出会い、義兄弟の契りを交わす。 秋頃、ソルボンヌ大学に入學し貨幣論を研究する。在仏三年間に三木清、佐伯祐三、ジャック・ルクリュ、ルイ・ジユベ等著名人と交際。 |

| 年号 | 年齢 | 出来事 |
|-----------------|-----|---|
| 昭和2 (1927)年 | 31歳 | 1月 長女万里子誕生。 3月 卒業論文「貨幣価値の歴史的变化について」の完成直後に肺炎で入院、肺結核が発見される。 5月 療養生活に入る。病が伝染することを防ぐため、万里子を郊外の託児所に預け、妻・金江は託児所の近くの知人宅へ下宿する。 |
| 昭和3 (1928)年 | 32歳 | スイスのレーザンの高原療養所に入り闘病生活を送るなか、作家への道を決意。 7月 帰国の許可を得る。 10月 フランス船アンドレ・ルボン号でマルセイユを出発して帰路につく。 11月13日 神戸港に入港。妻・金江の実家、名古屋の藍川邸に正月まで滞在。 |
| 昭和5 (1930)年 | 34歳 | 1月 次女朝子誕生。 2月 岳父藍川清成が東京市上落合（現・新宿区）に控家を構えた際、芹沢一家はそれを預かって麻布から転居する。 4月 「ブルジョア」が、改造社の懸賞小説一等に当選。雑誌『改造』4月号に掲載。賞金は1500円（※現在のお金に換算すると約300万円程）。光治良が「こうじろう」と紹介されたので、以後「芹沢光治良（せりざわ・こうじろう）」を筆名にする。 中央大学の講師となる。 9月 小説「我入道」を雑誌『改造』に発表。 |
| 昭和6 (1931)年 | 35歳 | 春、市河彦太郎の紹介で林芙美子、城夏子、平林たい子等を知る。 5月 岳父藍川清成が中野区小滝町5-2〔現、中野区東中野5丁目〕に新築した洋館に転居する。 6月 バリで義兄弟の誓いをして別れた海軍大佐百武源吾に七年ぶりに再会。作家になったことを喜び、励まされる。 4月16日～6月13日 小説「明日を逐うて」を東京朝日新聞の夕刊に連載。挿画は小山敬三。この連載が中央大学で問題になる。 |
| 昭和7 (1932)年 | 36歳 | 3月 中央大学の講師を辞任して、作家として自活することを決意。 4月 中央大学講師を辞任。 8月 中軽井沢の星野温泉の主人に勧められて、結核療養と創作のために長野県北佐久郡軽井沢町星野に別荘を新築する（後の太平洋戦争時の疎開先になる）。 |
| 昭和8 (1933)年 | 37歳 | 国文学を勉強するため東京帝国大学文学部に学士入学の願書を出す、入学はせず。 文芸家協会の理事（会計担当）に選出。 7月 三女文子誕生。 |
| 昭和10 (1935)年 | 39歳 | 9月 島崎藤村から依頼され、日本ペンクラブ会計主任となる。 |
| 昭和11 (1936)年 | 40歳 | 9月9日 実母はる死去、享年61。 9月 「文学界」の編集同人となる。 |
| 昭和12 (1937)年 | 41歳 | 6月20日 小説『秋箋』を竹村書房より出版。林芙美子装幀。 10月 石丸助三郎、胃癌のため東大病院で死去。 12月 養母藍川しむ死去。 |
| 昭和13 (1938)年 | 42歳 | 4月～7月 改造社の特派員の名目で、小説『愛と死の書』の取材のため中国に渡る。同盟通信社に勤めていた兄真一と途中まで同行。 7月 四女玲子誕生。 |
| 昭和16 (1941)年 | 45歳 | 秋頃、沼津中学校出身の一高生（和田稔・崎田宗夫・土井良太郎等十人程度）が、土曜日の夜、芹沢邸に集い、語る会「アランの会」をつくる。 12月8日 保護検束のために中野署へ出頭させられたが、義兄弟の契りを結んだ海軍大将の百武源吾と警察署長を知っていたことで放免となり、即日帰宅。 12月11日 随筆集『収穫』を東峰書房より出版。林芙美子装幀。 |
| 昭和17 (1942)年 | 46歳 | 6月 陸軍からの中支那への宣撫工作の要請を、健康診断書を提出し辞退。 7月 海軍からの南方作戦への従軍要請を、結核の既往症を理由に辞退。 |
| 昭和18 (1943)年 | 47歳 | 3月5日 小説『巴里に死す』を中央公論社より出版。装幀は猪熊弦一郎。 |
| 昭和19 (1944)年 | 48歳 | 戦争のため、作品の発表や出版が困難となる。神や宗教の問題を考え、イエス・キリストや中山みきの生涯や信仰を調べ、思索する。 春頃、三木清が書物の疎開等の忠告に来る。 4月15日 小説『離愁』を書き上げ、原稿を全国書房主田中秀吉に託す。また、小説『懺悔紀』の出版を養徳社の社長岡島善次に依頼する。 |
| 昭和20 (1945)年 | 49歳 | 3月 妻と下の二人の娘を中軽井沢の別荘に疎開させる。 4月 自身も中軽井沢へ。疎開先で、4月19日～8月8日に疎開日記、8月9日～翌21年1月22日に疎開日誌を書く。この二冊の日記は、後に『芹沢光治良戦中戦後日記』として平成27年3月に勉誠出版より出版。 5月25日 小説『未完の告白』の二章までを創作。 東京大空襲により東中野の自宅焼失。 8月15日 中軽井沢で終戦を迎える。 10月 講談社の社員が、山荘を訪ねて、雑誌『婦人倶楽部』に小説の連載依頼があり、小説「祈願」の執筆を始める。 東京で暮らす借家の件で、中軽井沢・東京間を往復する。 |
| 昭和21 (1946)年 | 50歳 | 1月 家族で東京に移る。麻布広尾町の近藤滋弥男爵邸（現・「翠州亭」、千葉県長生郡長柄町に移築。国有形文化財に指定）の茶室に仮住まいし、契約した家が空くのを待つ。 1月20日 世田谷区三宿町の借家に転居。 4月1日 市河彦太郎急逝。 5月13日 実父芹沢常晴死去。享年75。 |
| 昭和22 (1947)年 | 51歳 | 6月20日 長短編小説集『未完の告白』を銀座出版より出版。三岸節子装幀。 |

| 年号 | 年齢 | 出来事 |
|-----------------|-----|---|
| 昭和23 (1948)年 | 52歳 | 9月頃より急性喘息がおこり、以後度々苦しめられる。 9月7日 岳父藍川清成死去 9月30日 『緑の校庭』をポプラ社より出版。 |
| 昭和24 (1949)年 | 53歳 | 4月15日 『秘蹟』を天理教道友社より出版。 |
| 昭和25 (1950)年 | 54歳 | 日本ペンクラブ広島大会に参加し、被爆者援助会を支援。 |
| 昭和26 (1951)年 | 55歳 | 『巴里に死す』の仏訳出版の契約をロベール・ラフォン社と結ぶ。 |
| 昭和28 (1953)年 | 57歳 | 9月 仏訳『巴里に死す』をロベール・ラフォン社より出版。 |
| 昭和29 (1954)年 | 58歳 | 国語審議会委員と、日本文芸家協会理事渉外委員長を務める。 |
| 昭和30 (1955)年 | 59歳 | 5月 仏訳『サムライの末裔』をロベール・ラフォン社より出版。 |
| 昭和31 (1956)年 | 60歳 | 4月15日 毎日新聞に「日本に大河小説が登場、芹沢氏五千枚の『運命』を書き始める」との報道。この年から大河小説『人間の運命』の資料集めや構想を始める。 仏訳「巴里に死す」が『マリ・クレール』に連載され、ベルギーの読者クラブ賞次席となる。 |
| 昭和32 (1957)年 | 61歳 | 6月 第29回世界ペン大会の際に自宅に他国の文学者達を招く必要があり、中野区小滝町の旧居跡に家を新築する。 9月 第29回世界ペン大会を東京で開催。日本ペンクラブ副会長として、会長の川端康成と尽力。大会中と大会後の二回、自宅でパーティーを開いて外国の会員を招く。 この年、ユネスコ国内委員に選ばれて、以後三期委員を務める。 |
| 昭和34 (1959)年 | 63歳 | 1月 フランス詩人連盟より『巴里に死す』などに対し、フランス友好国際大賞が贈られる。 4月6日 書き下ろし長編小説『坂の上の家』が、NHKラジオの「朝の小説」で全102回放送される。語り手は小沢栄太郎。 9月15日 小説『坂の上の家』を中央公論社より出版。 12月25日 伝記小説『教祖様』を角川書店より出版。 |
| 昭和35 (1960)年 | 64歳 | この年、スルガ銀行頭取岡野喜一郎に案内されて、生地沼津の山河を歩き、かねて構想中の大河小説『人間の運命』の舞台を、この故郷に決定する。また、若き友柴田徳衛が、創作の資料として明治以後の政治・経済・文化などに関する詳細な年表を作成して提供する。 |
| 昭和36 (1961)年 | 65歳 | 4月 肺癌の疑いで検査入院をする。肺癌でないことが判明したが、このことが契機となって、かねてから構想してきた大河小説『人間の運命』の創作を本格的に開始するために、依頼原稿を全て断り、その準備に没頭することを決意。 11月20日 小説『愛と知と悲しみと』を書き下ろして新潮社より出版。 |
| 昭和37 (1962)年 | 66歳 | 7月30日 大河小説『人間の運命』（昭和43年11月まで書き下ろし刊行）を新潮社より出版。 |
| 昭和38 (1963)年 | 67歳 | 3月10日 故郷の沼津市我入道の海浜に文学碑「風に鳴る碑」が建立。 |
| 昭和39 (1964)年 | 68歳 | 12月1日 随筆「『人間の運命』創作余話」を産経新聞（夕刊）に発表。 |
| 昭和40 (1965)年 | 69歳 | 2月15日 『女にうまれて』がドラマ化され、日本テレビで放映。主演・磯村みどり。 ～5月15日 5月 『人間の運命』が芸術選奨文部大臣賞受賞。 10月1日 前会長川端康成の推薦により、日本ペンクラブ会長に選ばれる。 |
| 昭和41 (1966)年 | 70歳 | 3月30日 自伝『私の履歴書（第26集）』が日本経済新聞社から出版。 |
| 昭和43 (1968)年 | 72歳 | 4月 多年ユネスコ運動に尽くした功績により、勲三等瑞宝賞を受賞。 |
| 昭和44 (1969)年 | 73歳 | 2月 スウェーデンアカデミーよりノーベル文学賞推薦委員に選ばれる。 4月8日 大河小説『人間の運命』三部全十四巻に対して芸術院賞を受賞。 6月2日 大河小説『人間の運命』への芸術院賞授賞式が日本芸術院会館で行われ、祝賀会がホテル・ニューオータニで開催される。 |
| 昭和45 (1970)年 | 74歳 | 5月 沼津市我入道曼陀ヶ原（まんだがはら）に芹沢光治良文学館開館。 12月 日本芸術院会員に選ばれる。 |
| 昭和46 (1971)年 | 75歳 | 1月9日 芹沢文学館で芸術院会員の祝賀会が開催される。 9月12日～18日の第38回国際ペン大会（創立50周年記念大会・ダブリン）で、国際会長に日本ペンクラブより推薦されたが、最終候補にならず。【ドイツのハインリヒが選ばれる】。 |
| 昭和47 (1972)年 | 76歳 | 1月 長女万里子死去。 『遠ざかった明日』を新潮社より出版。 3月5日 芹沢文学館で大河小説『人間の運命』の終章の『遠ざかった明日』の出版を祝う会に出席。 |
| 昭和48 (1973)年 | 77歳 | 11月25日 井上靖文学館の開館式で挨拶。「駿河なるわが故郷よ」を作詞し、この日に披露する。 12月 NHK銀河テレビ小説で『坂の上の家』を放映。高橋玄洋脚本、加東大介主演。 |

| 年号 | 年齢 | 出来事 |
|-------------------------|-----|---|
| 昭和49 (1974)年 | 78歳 | 2月 『芹沢光治良作品集』全十六巻を新潮社より出版。 ～翌年5月 4月 老齢の故に文芸家協会の理事を辞任。 9月19日 フランス政府から日仏文化交流の功労者として、文学・芸術の勲章であるコマンドール章を受章。 11月 任期中であったが、日本ペンクラブ会長を辞任。 |
| 昭和50 (1975)年 | 79歳 | 7月13日 菊池勇夫死去。 |
| 昭和51 (1976)年 | 80歳 | 1月15日 百武源吾、浜松市の病院で死去。 4月 医師の定期診断で、喘息が完治したと告げられ、還暦の祝いをして、これまでの病弱人生に別れ、健康人生を始めるように勧められる。 5月10日 芹沢文学館前の松林で、文学館関係者、沼津市民、知友および愛読者によって、還暦祝（長寿の祝い）が催される。午後に我入道公会堂で講演会。 |
| 昭和52 (1977)年 | 81歳 | 7月17日 東京に芹沢文学研究会が発会し、中野サンプラザで記念講演を行う。 |
| 昭和53 (1978)年 | 82歳 | 11月5日 沼津精華高校講堂で「人間の生き方」と題して講演。井上靖氏も講演する。 |
| 昭和54 (1979)年 | 83歳 | 12月6日 沼津市の名誉市民に推薦される。 12月20日 署名入り限定版文学全集として小説『ブルジョア』を成瀬書房より出版。 |
| 昭和55 (1980)年 | 84歳 | 2月 沼津市名誉市民章を受章。 4月19日 沼津市民名誉市民章贈呈式で、「沼津とわたし」と題して記念講演を行う。 5月4日 故郷の我入道で村民から名誉市民の祝賀を受ける。 5月18日 芹沢文学研究会が作家生活50周年記念を祝賀。 11月23日 我入道の生地跡に「芹沢光治良 生誕碑」が建立。 |
| 昭和56 (1981)年 | 85歳 | 4月18日 妻・金江が舌癌の治療のために慶応病院に入院。 |
| 昭和57 (1982)年 | 86歳 | 2月4日 妻・金江死去。享年79。 7月 沼津市民文化センターのロビー壁面に詩碑が建立。 8月 我入道の浜辺に芹沢光治良文学碑「孤絶の碑」が建立。その除幕式が行われる。 |
| 昭和59 (1984)年 | 88歳 | 4月15日 我入道コミュニティ防災センター正面に詩碑が建立。 |
| 昭和61 (1986)年 | 90歳 | 7月20日 『神の微笑』を新潮社より出版。 |
| 昭和62 (1987)年 | 91歳 | 7月20日 『神の慈愛』を新潮社より出版。 |
| 昭和63 (1988)年 | 92歳 | 7月28日 『神の計画』を新潮社より出版。 8月20日 沼津市民文化センターの前庭に沼津中学同窓会によって詩碑が建立。 |
| 昭和64・平成 元 (1989)年 | 93歳 | 4月6日 沼津東高校に文学碑が建立され、除幕式が行われる。 7月20日 『人間の幸福』を新潮社より出版。 10月 「『大自然唯一の神』に支えられ」を『朝日新聞』に掲載。 |
| 平成2 (1990)年 | 94歳 | 7月1日 『人間の意志』を新潮社より出版。 |
| 平成3 (1991)年 | 95歳 | 7月5日 『人間の生命』を新潮社より出版。 8月25日 愛蔵版『人間の運命』（全七冊・箱入り）を新潮社より再版。 |
| 平成4 (1992)年 | 96歳 | 6月15日 『大自然の夢』を新潮社より出版。 |
| 平成5 (1993)年 | 没 | 3月23日 ふだんどおり原稿執筆の後、午後七時、老衰のため自宅で死去。享年96。 4月6日 東京の青山斎場で「故芹沢光治良儀 お別れの会」が、無宗教の音楽葬の形式で執り行われる。 7月10日 『天の調べ』を新潮社より出版。 |

参考文献

- 『評伝芹沢光治良』勝呂奏/著、翰林書房、2008
『芹沢光治良先生追悼文集』平山惟美/著、芹沢光治良文学愛好会、1995
『新潮日本文学アルバム62 芹沢光治良』新潮社、1995
『国文学解釈と鑑賞 別冊』芹沢光治良 至文堂、2006
『芹沢光治良文学館』12 芹沢光治良/著、新潮社、1997

展示風景

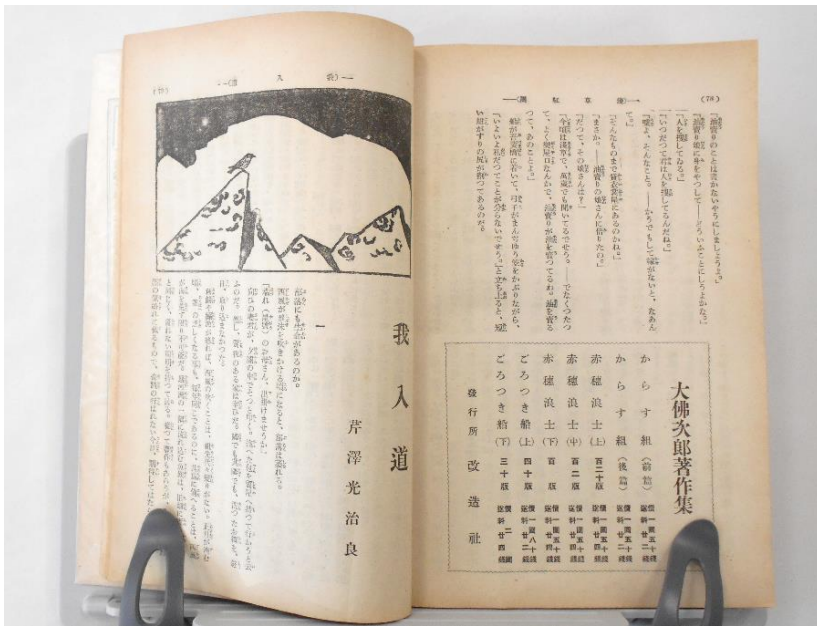
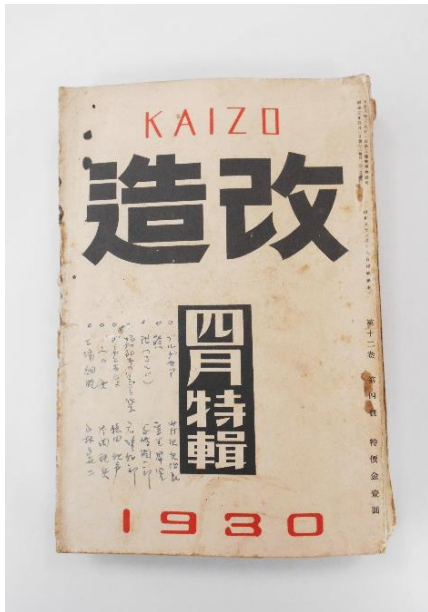


- 上：展示スペース
- 右：図書館入り口前ガラスケース
- 下：平置きガラスケース

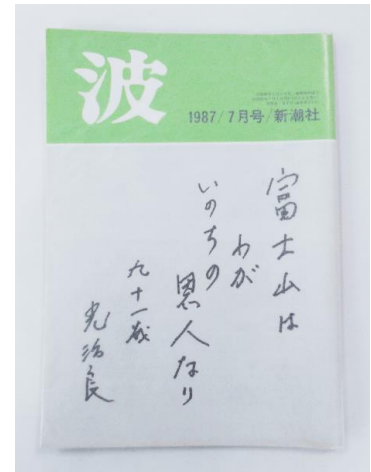


展示物

提供：中野区立第三中学校 芹沢光治良記念文庫



上：『改造』1930年4月特集, 改造社 「ブルジョア」掲載
 下：『改造』1930年9月号, 改造社 「我入道」掲載



左：『婦人公論』昭和17年1月号，中央公論社 「巴里に死す」掲載
 中央：『文藝』林芙美子読本 昭和32年3月臨時増刊，河出書房 「お芙美さんのこと」対談掲載
 右：『波』昭和62年7月号，新潮社

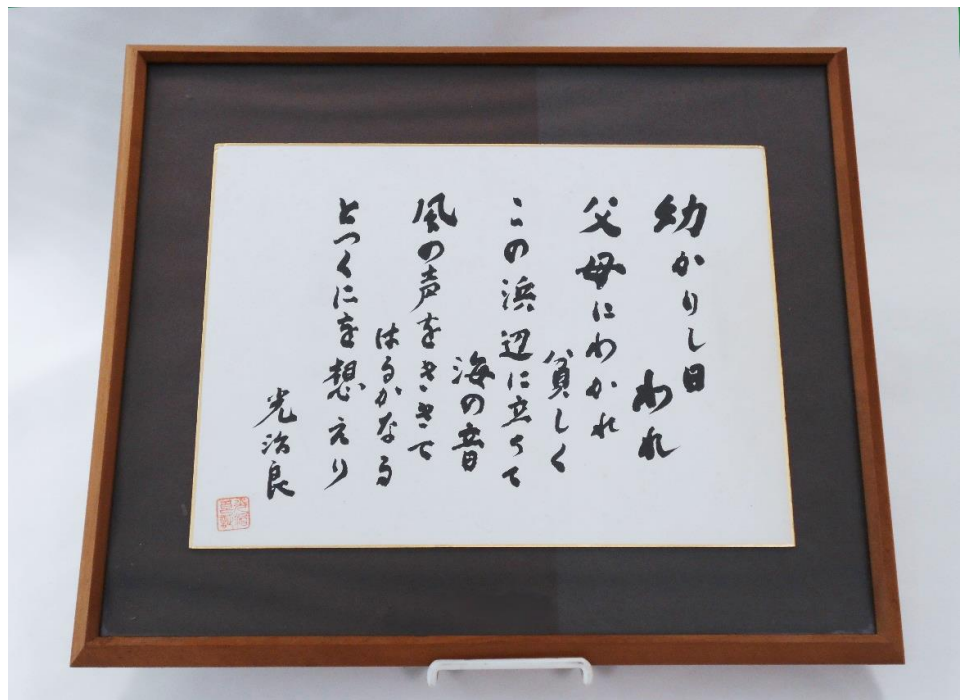


▲ 『緑の校庭』ポプラ社，1948年 ▲ 『美しき旅路』ポプラ社，1950年 ▲ 『秘蹟』天理教道友社，1949年



▲ 『美しき娘たち』河出書房，1955年 ▲ 『愛と死の書』小山書店，1939年

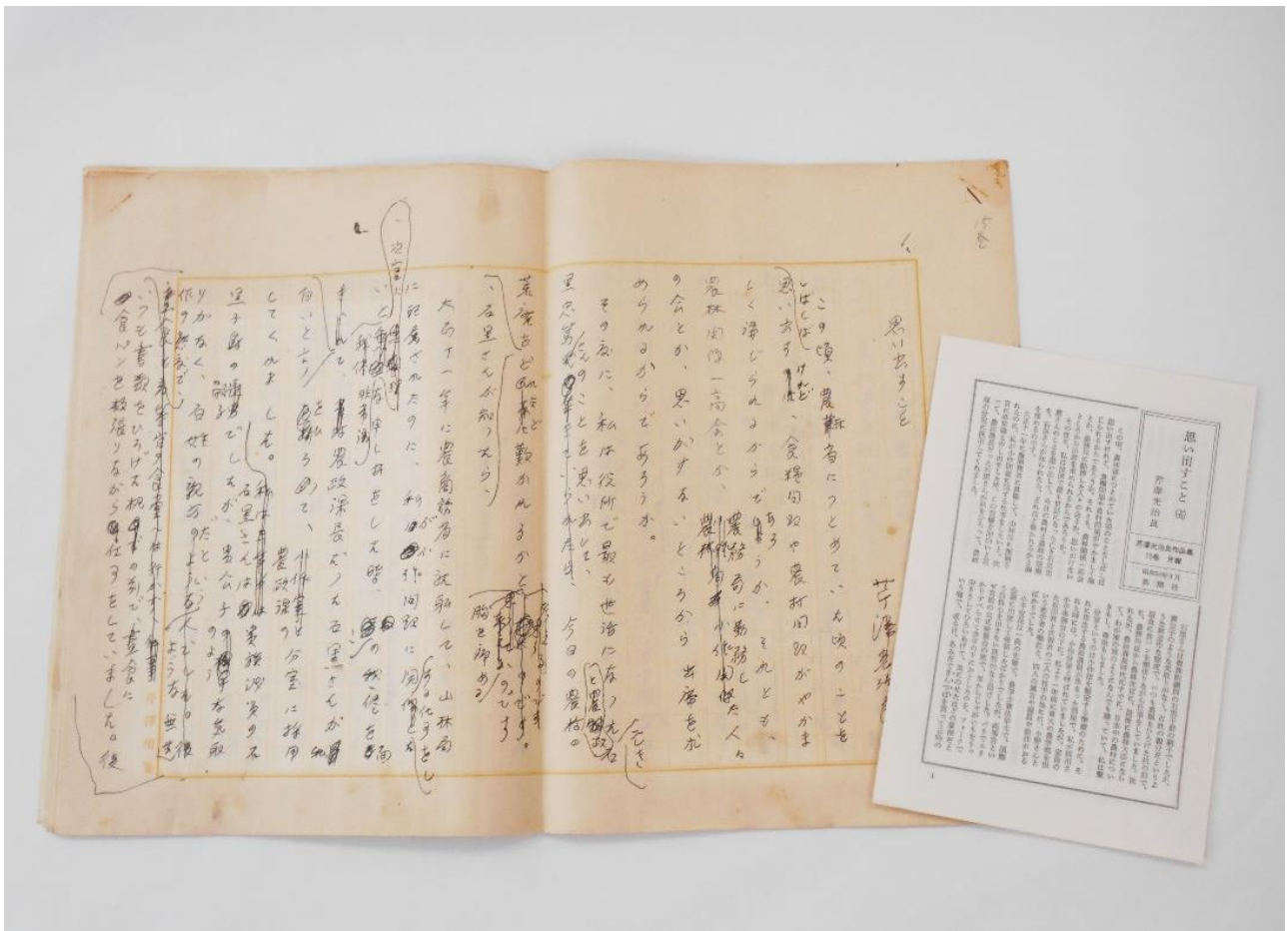
- ▶ 『それいゆ』 1959年2月号, ひまわり社
「パリの留学生」掲載



- ▶ 芹沢光治良直筆色紙



▲ 生前、芹沢氏が愛用していた文具と懐中時計



▲ 『芹沢光治良作品集』15巻 新潮社、1974年 月報「思い出すこと」直筆原稿

第14回中野区ゆかりの著作者紹介展示
「芹沢光治良 ～中野小滝町に暮らしたエクリバン～」ブックリスト

芹沢光治良

| 展示 | 書名 | 著者名 | 出版者名 | 出版年 | 請求記号 | 禁帯 | |
|----|------------------------------|---------------------|---------|------|--------|----|----|
| | 人間の運命 第1部 第1巻 | 芹沢 光治良／著 | 新潮社 | 1962 | 913.6 | セリ | 禁帯 |
| | 人間の運命 第1部 第2巻 | 芹沢 光治良／著 | 新潮社 | 1963 | 913.6 | セリ | 禁帯 |
| | 人間の運命 第1部 第3巻 | 芹沢 光治良／著 | 新潮社 | 1963 | 913.6 | セリ | 禁帯 |
| | 人間の運命 第1部 第4巻 | 芹沢 光治良／著 | 新潮社 | 1963 | 913.6 | セリ | 禁帯 |
| | 人間の運命 第1部 第5巻 | 芹沢 光治良／著 | 新潮社 | 1964 | 913.6 | セリ | 禁帯 |
| | 人間の運命 第1部 第6巻 | 芹沢 光治良／著 | 新潮社 | 1964 | 913.6 | セリ | 禁帯 |
| | 人間の運命 第2部 第1巻 | 芹沢 光治良／著 | 新潮社 | 1965 | 913.6 | セリ | 禁帯 |
| | 人間の運命 第2部 第2巻 | 芹沢 光治良／著 | 新潮社 | 1965 | 913.6 | セリ | 禁帯 |
| | 人間の運命 第2部 第3巻 | 芹沢 光治良／著 | 新潮社 | 1966 | 913.6 | セリ | 禁帯 |
| | 人間の運命 第2部 第4巻 | 芹沢 光治良／著 | 新潮社 | 1966 | 913.6 | セリ | 禁帯 |
| | 人間の運命 第2部 第5巻 | 芹沢 光治良／著 | 新潮社 | 1967 | 913.6 | セリ | 禁帯 |
| | 人間の運命 第2部 第6巻 | 芹沢 光治良／著 | 新潮社 | 1967 | 913.6 | セリ | 禁帯 |
| | 人間の運命 第3部 第1巻 | 芹沢 光治良／著 | 新潮社 | 1968 | 913.6 | セリ | 禁帯 |
| | 人間の運命 第3部 第2巻 | 芹沢 光治良／著 | 新潮社 | 1968 | 913.6 | セリ | 禁帯 |
| ★ | ブルジョア 落葉の声 (芹沢光治良作品集) | 芹沢 光治良／著 | 新潮社 | 1974 | 913.6 | セリ | |
| ★ | 巴里に死す (角川文庫) | 芹沢 光治良／著 | 角川書店 | 1977 | 913.6 | セリ | |
| ★ | われに背くとも | 芹沢 光治良／著 | 新潮社 | 1977 | 913.6 | セリ | |
| | レマン湖のほとり | 芹沢 光治良／著 | 新潮社 | 1977 | 913.6 | セリ | |
| | 愛と知と悲しみと | 芹沢 光治良／著 | 新潮社 | 1977 | 913.6 | セリ | |
| ★ | 坂の上の家(角川文庫) | 芹沢 光治良／著 | 角川書店 | 1978 | 913.6 | セリ | |
| ★ | 坂の上の家 | 芹沢 光治良／著 | 中央公論社 | 1979 | 913.6 | セリ | |
| ★ | 狭き門より | 芹沢 光治良／著 | 新潮社 | 1976 | 913.6 | セリ | |
| ★ | 人生について・結婚について | 芹沢 光治良／著 | 新潮社 | 1979 | 914.6 | セリ | |
| | こころの窓 | 芹沢 光治良／著 | 新潮社 | 1979 | 914.6 | セリ | |
| | 死の扉の前で | 芹沢 光治良／著 | 新潮社 | 1979 | 913.6 | セリ | |
| | 命ある日(角川文庫) | 芹沢 光治良／著 | 角川書店 | 1979 | 913.6 | セリ | |
| | 教祖様 | 芹沢 光治良／著 | 善本社 | 1979 | 913.6 | セリ | |
| ★ | 愛の影は長く | 芹沢 光治良／著 | 新潮社 | 1981 | 913.6 | セリ | |
| | 巴里に死す(新潮文庫) | 芹沢 光治良／著 | 新潮社 | 1986 | 913.6 | セリ | |
| ★ | 神の微笑 | 芹沢 光治良／著 | 新潮社 | 1986 | 913.6 | セリ | |
| ★ | 神の慈愛 | 芹沢 光治良／著 | 新潮社 | 1987 | 913.6 | セリ | |
| ★ | 神の計画 | 芹沢 光治良／著 | 新潮社 | 1988 | 913.6 | セリ | |
| ★ | 人間の幸福 | 芹沢 光治良／著 | 新潮社 | 1989 | 913.6 | セリ | |
| ★ | 人間の意志 | 芹沢 光治良／著 | 新潮社 | 1990 | 913.6 | セリ | |
| ★ | 人間の生命 | 芹沢 光治良／著 | 新潮社 | 1991 | 913.6 | セリ | |
| ★ | 大自然の夢 | 芹沢 光治良／著 | 新潮社 | 1992 | 913.6 | セリ | |
| ★ | 天の調べ | 芹沢 光治良／著 | 新潮社 | 1993 | 913.6 | セリ | |
| ★ | 人間の運命 1 | 芹沢 光治良／著 | 新潮社 | 1991 | 913.6 | セリ | |
| ★ | 人間の運命 2 | 芹沢 光治良／著 | 新潮社 | 1991 | 913.6 | セリ | |
| ★ | 人間の運命 3 | 芹沢 光治良／著 | 新潮社 | 1991 | 913.6 | セリ | |
| ★ | 人間の運命 4 | 芹沢 光治良／著 | 新潮社 | 1991 | 913.6 | セリ | |
| ★ | 人間の運命 5 | 芹沢 光治良／著 | 新潮社 | 1991 | 913.6 | セリ | |
| ★ | 人間の運命 6 | 芹沢 光治良／著 | 新潮社 | 1991 | 913.6 | セリ | |
| ★ | 人間の運命 7 | 芹沢 光治良／著 | 新潮社 | 1991 | 913.6 | セリ | |
| ★ | 芹沢光治良文学館 1 命ある日 | 芹沢 光治良／著 | 新潮社 | 1995 | 918.68 | セリ | |
| ★ | 芹沢光治良文学館 2 夜毎の夢に | 芹沢 光治良／著 | 新潮社 | 1995 | 918.68 | セリ | |
| ★ | 芹沢光治良文学館 3 愛と知と悲しみと | 芹沢 光治良／著 | 新潮社 | 1996 | 918.68 | セリ | |
| ★ | 芹沢光治良文学館 4 ここに望あり | 芹沢 光治良／著 | 新潮社 | 1996 | 918.68 | セリ | |
| ★ | 芹沢光治良文学館 5 教祖様 | 芹沢 光治良／著 | 新潮社 | 1996 | 918.68 | セリ | |
| ★ | 芹沢光治良文学館 6 一つの世界 | 芹沢 光治良／著 | 新潮社 | 1996 | 918.68 | セリ | |
| ★ | 芹沢光治良文学館 7 幸福の鏡 | 芹沢 光治良／著 | 新潮社 | 1996 | 918.68 | セリ | |
| ★ | 芹沢光治良文学館 8 春箋・秋箋 | 芹沢 光治良／著 | 新潮社 | 1996 | 918.68 | セリ | |
| ★ | 芹沢光治良文学館 9 明日を逐うて | 芹沢 光治良／著 | 新潮社 | 1997 | 918.68 | セリ | |
| ★ | 芹沢光治良文学館 10 死者との対話 | 芹沢 光治良／著 | 新潮社 | 1997 | 918.68 | セリ | |
| ★ | 芹沢光治良文学館 11 文学と人生 | 芹沢 光治良／著 | 新潮社 | 1997 | 918.68 | セリ | |
| ★ | 芹沢光治良文学館 12 こころの広場 | 芹沢 光治良／著 | 新潮社 | 1997 | 918.68 | セリ | |
| ★ | 人間の運命 1 完全版 次郎の生いたち | 芹沢 光治良／著 | 勉誠出版 | 2013 | 913.6 | セリ | |
| ★ | 人間の運命 2 完全版 親と子 | 芹沢 光治良／著 | 勉誠出版 | 2013 | 913.6 | セリ | |
| ★ | 人間の運命 3 完全版 友情 | 芹沢 光治良／著 | 勉誠出版 | 2013 | 913.6 | セリ | |
| ★ | 人間の運命 4 完全版 愛 | 芹沢 光治良／著 | 勉誠出版 | 2013 | 913.6 | セリ | |
| ★ | 人間の運命 5 完全版 出発 | 芹沢 光治良／著 | 勉誠出版 | 2013 | 913.6 | セリ | |
| ★ | 人間の運命 6 完全版 失われた人 | 芹沢 光治良／著 | 勉誠出版 | 2013 | 913.6 | セリ | |
| ★ | 人間の運命 7 完全版 結婚 | 芹沢 光治良／著 | 勉誠出版 | 2013 | 913.6 | セリ | |
| ★ | 人間の運命 8 完全版 孤独の道 | 芹沢 光治良／著 | 勉誠出版 | 2013 | 913.6 | セリ | |
| ★ | 人間の運命 9 完全版 嵐のまえ | 芹沢 光治良／著 | 勉誠出版 | 2013 | 913.6 | セリ | |
| ★ | 人間の運命 10 完全版 愛と死 | 芹沢 光治良／著 | 勉誠出版 | 2013 | 913.6 | セリ | |
| ★ | 人間の運命 11 完全版 夫婦の絆 | 芹沢 光治良／著 | 勉誠出版 | 2013 | 913.6 | セリ | |
| ★ | 人間の運命 12 完全版 戦野にたつ | 芹沢 光治良／著 | 勉誠出版 | 2013 | 913.6 | セリ | |
| ★ | 人間の運命 13 完全版 暗い日々 | 芹沢 光治良／著 | 勉誠出版 | 2013 | 913.6 | セリ | |
| ★ | 人間の運命 14 完全版 夜明け | 芹沢 光治良／著 | 勉誠出版 | 2013 | 913.6 | セリ | |
| ★ | 人間の運命 15 完全版 再会 | 芹沢 光治良／著 | 勉誠出版 | 2013 | 913.6 | セリ | |
| ★ | 人間の運命 16 完全版 遠ざかった明日 | 芹沢 光治良／著 | 勉誠出版 | 2013 | 913.6 | セリ | |
| ★ | 人間の運命 17 完全版 愛と知と悲しみと | 芹沢 光治良／著 | 勉誠出版 | 2013 | 913.6 | セリ | |
| ★ | 人間の運命 18 完全版 岡野喜太郎伝・解題・関連資料集 | 芹沢 光治良／著 | 勉誠出版 | 2013 | 913.6 | セリ | |
| ★ | 芹沢光治良戦中戦後日記 | 芹沢 光治良／著 | 勉誠出版 | 2015 | 915.6 | セリ | |
| ★ | 緑の校庭 | 芹沢 光治良／著 | ポプラ社 | 2017 | 913.6 | セリ | |
| | 日本文学全集 50 阿部知二・芹沢光治良集 | 阿部 知二／著 芹沢 光治良／著 | 新潮社 | 1964 | 918.6 | 二 | |
| | 私の履歴書 第26集 | 日本経済新聞社／編 | 日本経済新聞社 | 1966 | 281 | ワ | |
| | 昭和文学盛衰史 | 高見 順／著 | 講談社 | 1966 | 910.26 | タ | |
| | 日本短編文学全集 40 | 臼井 吉見／編 | 筑摩書房 | 1968 | 913 | 二 | |
| | 権名麟三全集 19 | 権名 麟三／著 | 冬樹社 | 1976 | 918.68 | シイ | |
| | Pen随想 ベンクラブ激動の半世紀 | 高橋 健二／著 | 東京書籍 | 1984 | 910.6 | タ | |

**第14回中野区ゆかりの著作者紹介展示
「芹沢光治良 ～中野小滝町に暮らしたエクリバン～」ブックリスト**

| | | | | | | | |
|--|---|--------------------------|------------|------|---------|-----|----|
| | 落合文士村 | 目白学園女子短期大学 国語国文科研究室／著 | 双文社出版 | 1984 | Q90 | B04 | 禁帯 |
| | 思い出の幾山河 | 小山 武夫／著 | 中日新聞本社 | 1986 | 914.6 | コヤ | |
| | 生きるための死に方（新潮文庫） | 新潮45編集部／編 | 新潮社 | 1992 | 914.6 | イキ | |
| | はくもくれん 芹沢光治良先生とのお別れの記録 | 芹沢光治良文学愛好会／編 | 芹沢光治良文学愛好会 | 1993 | 289.1 | セ | 禁帯 |
| | 文学よもやま話 上 池島信平対談集 | 池島 信平／著 | 恒文社 | 1995 | 914.6 | イケ | |
| | 新潮日本文学アルバム 62 芹沢光治良 | | 新潮社 | 1995 | 910.26 | シ | |
| | 芹沢光治良先生追悼文集 | 平山 惟美／編 | 芹沢光治良文学愛好会 | 1995 | 910.268 | セリ | |
| | 芹沢光治良と沼津 | 芹沢記念会[ほか]／編・著 | 芹沢記念企画 | 1996 | 910.268 | セリ | |
| | 軽井沢高原文庫通信 第33号 | | 軽井沢高原文庫 | 1996 | 910.268 | セリ | 禁帯 |
| | 高原文庫 11号 | | 軽井沢高原文庫 | 1996 | 910.268 | セリ | 禁帯 |
| | 創立五十周年記念誌 | 中野区立第三中学校／編 | 中野区 | 1997 | J9 | A | 禁帯 |
| | ことばが映す人生 | 大岡 信／著 | 小学館 | 1997 | 914.6 | オオ | |
| | 国文学解釈と鑑賞 第62巻9号 特集芹沢光治良の世界 | | 至文堂 | 1997 | Q90 | A | 禁帯 |
| | 芹沢光治良の世界 | 梶川 敦子／著 | 青弓社 | 2000 | 910.268 | セリ | |
| | 恋愛の昭和史 | 小谷野 敦／著 | 文藝春秋 | 2005 | 910.26 | コ | |
| | 旧制一高の文学 上田敏・谷崎潤一郎・川端康成・池谷信三郎・堀辰雄・中島敦・立原道造らの系譜 | 稲垣 真美／著 | 国書刊行会 | 2006 | 910.26 | イ | |
| | 芹沢光治良 世界に発信する福音としての文学 （『国文学解釈と鑑賞』別冊） | 野乃宮 紀子／編集 渡部 芳紀／編集 | 至文堂 | 2006 | 910.268 | セリ | |
| | 芹沢光治良研究 | 鈴木 吉維／著 | おうふう | 2007 | 910.268 | セリ | |
| | 評伝芹沢光治良 同伴する作家 | 勝呂 奏／著 | 翰林書房 | 2008 | 910.268 | セリ | |
| | 郊外の文学誌（岩波現代文庫） | 川本 三郎／著 | 岩波書店 | 2012 | 910.26 | カ | |

藍川清成

| 展示 | 書名 | 著者名 | 出版者名 | 出版年 | 請求記号 | 禁帯 |
|----|--------------------|----------|---------|------|-------|----|
| ★ | 人物と事件でつづる私鉄百年史 | 和久田 康雄／著 | 鉄道図書刊行会 | 1991 | 686.2 | ワ |
| ★ | 創意に生きる 中京財界史（文春文庫） | 城山 三郎／著 | 文芸春秋 | 1994 | 332.1 | シ |

石丸助三郎

| 展示 | 書名 | 著者名 | 出版者名 | 出版年 | 請求記号 | 禁帯 |
|----|------------------------|---------|------|------|-------|----|
| ★ | 西村伊作の楽しみ住家 大正デモクラシーの住い | 田中 修司／著 | はる書房 | 2001 | 523.1 | ニ |

岡野喜一郎

| 展示 | 書名 | 著者名 | 出版者名 | 出版年 | 請求記号 | 禁帯 |
|----|-----------------------|---------|---------|------|-------|----|
| | 閨閣 日本のニュー・エスタブリッシュメント | 佐藤 朝泰／著 | 立風書房 | 1987 | 361.8 | サ |
| ★ | 日本地方金融史 | 日経金融新聞 | 日本経済新聞社 | 2003 | 338.2 | ニ |

市河彦太郎

| 展示 | 書名 | 著者名 | 出版者名 | 出版年 | 請求記号 | 禁帯 |
|----|--------------------------|-----------|-------|------|-------|----|
| ★ | ことば・文化・教育 アングロ・サクソン文明の周辺 | 渡部 昇一／著 | 大修館書店 | 1982 | 361.5 | ワ |
| ★ | 文庫博覧会 | 奥村 敏明／著 | 青弓社 | 1999 | 027.4 | オ |
| ★ | 総力戦と音楽文化 音と声の戦争 | 戸ノ下 達也／編著 | 青弓社 | 2008 | 762.1 | ト |

有島武郎

| 展示 | 書名 | 著者名 | 出版者名 | 出版年 | 請求記号 | 禁帯 |
|----|------------------------|-------------|-------|---------|---------|----|
| ★ | 或る女 前編（岩波文庫） | 有島 武郎／著 | 岩波書店 | 1950 | 913.6 | アリ |
| ★ | 或る女 後編（岩波文庫） | 有島 武郎／著 | 岩波書店 | 1950 | 913.6 | アリ |
| ★ | 日本の文学 27 有島武郎 長与善郎 | 有島 武郎[ほか]／著 | 中央公論社 | 1967 | 918.6 | ニ |
| ★ | 新潮日本文学 9 有島武郎集 | 有島 武郎／著 | 新潮社 | 1978 | 918.6 | シ |
| ★ | カインの末裔 クララの出家 改版(岩波文庫) | 有島 武郎／著 | 岩波書店 | 1980 | 913.6 | アリ |
| ★ | 惜みなく愛は奪う 改版(岩波文庫) | 有島 武郎／著 | 岩波書店 | 1980 | 914.6 | アリ |
| ★ | 有島武郎全集 全15巻 別巻1巻 | 有島 武郎／著 | 筑摩書房 | 1979-88 | 918.68 | アリ |
| | 新潮日本文学アルバム 9 有島武郎 | | 新潮社 | 1984 | 910.26 | シ |
| | 父有島武郎と私 | 神尾 行三／著 | 右文書院 | 1997 | 910.268 | アリ |
| ★ | 小さき者へ・生れ出ずる悩み 改版(岩波文庫) | 有島 武郎／著 | 岩波書店 | 2004 | 913.6 | アリ |

第14回中野区ゆかりの著作者紹介展示
「芹沢光治良 ～中野小滝町に暮らしたエクリバン～」ブックリスト

百武源吾

| 展示 | 書名 | 著者名 | 出版者名 | 出版年 | 請求記号 | 禁帯 | |
|----|-----------------------------------|------------|--------------|------|-------|----|----|
| | 近代の戦争 1 日清戦争 | 松下 芳男／著 | 人物往来社 | 1966 | 210.6 | キ | |
| | 軍艦長門の生涯 上巻 | 阿川 弘之／著 | 新潮社 | 1978 | 913.6 | アガ | |
| | 軍艦長門の生涯 下巻 | 阿川 弘之／著 | 新潮社 | 1979 | 913.6 | アガ | |
| ★ | 回想の日本海軍 | 水交会／編 | 原書房 | 1985 | 397.2 | カ | |
| ★ | 昭和天皇に背いた伏見宮元帥 (徳間文庫) | 生出 寿／著 | 徳間書店 | 1991 | 397.2 | オ | |
| | 革命家・北一輝 「日本改造法案大綱」と昭和維新 | 豊田 穰／著 | 講談社 | 1991 | 289.1 | キ | |
| | 昭和史三部作 | 上坂 冬子／著 | 中央公論社 | 1995 | 210.7 | カ | |
| | 日本海軍史 第三巻 | 海軍歴史保存会／編 | 海軍歴史保存会 | 1996 | 397.2 | ニ | |
| | 日本海軍史 第四巻 | 海軍歴史保存会／編 | 海軍歴史保存会 | 1996 | 397.2 | ニ | |
| | 山本五十六再考 (中公文庫) | 野村 實／著 | 中央公論社 | 1996 | 397.2 | ノ | |
| | 山本五十六自決セリ | 大野 芳／著 | 新潮社 | 1996 | 913.6 | オオ | |
| | 武と文の義兄弟 百武源吾・海軍大将と作家芹沢光治良氏との交友 | 石井 稔／編 | 「武と文の義兄弟」刊行会 | 1996 | 289.1 | セ | 禁帯 |
| | 日本陸海軍総合事典 | 秦 郁彦／編 | 東京大学出版会 | 2005 | 392.1 | ハ | 禁帯 |
| ★ | 海の武士道 | 恵 隆之介／著 | 産経新聞出版 | 2008 | 391.2 | メ | |
| | 誰でも読める日本現代史年表 | 吉川弘文館編集部／編 | 吉川弘文館 | 2008 | 210.7 | ダ | |

三木清

| 展示 | 書名 | 著者名 | 出版者名 | 出版年 | 請求記号 | 禁帯 |
|----|-------------------|---------------------|---------|------|-------|----|
| ★ | 三木清全集 第1巻 | 三木 清／著 | 岩波書店 | 1966 | 121.6 | ミ |
| ★ | 現代日本思想大系 33 三木清 | 三木 清／著 | 筑摩書房 | 1977 | 081 | ゲ |
| ★ | パスカルにおける人間の研究 | 久野 収／編集・解説 | 岩波書店 | 1980 | 135.2 | ミ |
| ★ | 三木清 | 三木 清／著 | 岩波書店 | 1980 | 135.2 | ミ |
| ★ | ソクラテス | 宮川 透／著 | 東京大学出版会 | 1983 | 121.6 | ミ |
| ★ | 三木清 | 三木 清 | 岩波書店 | 1984 | 131.2 | ミ |
| ★ | 三木清エッセンス | 三木 清／著 | こぶし書房 | 2000 | 121.6 | ミ |
| ★ | 人生論ノート | 内田 弘／編・解説 | こぶし書房 | 2000 | 121.6 | ミ |
| ★ | 哲学ノート (中公文庫) | 三木 清／著 | PHP研究所 | 2009 | 121.6 | ミ |
| ★ | 三木清 | 三木 清／著 | 中央公論新社 | 2010 | 121.6 | ミ |
| ★ | 三木清 | 永野 基綱／著 | 清水書院 | 2015 | 121.6 | ミ |
| ★ | 三木清遺稿「親鸞」死と伝統について | 三木 清／著 子安 宣邦／編・著 | 白澤社 | 2017 | 121.6 | ミ |

アンドレ・ジッド

| 展示 | 書名 | 著者名 | 出版者名 | 出版年 | 請求記号 | 禁帯 |
|----|---------------------------------------|-------------------------------|--------|------|-------|----|
| ★ | 世界文学全集 2-19 狭き門／田園交響楽／償金つかい | アンドレ・ジッド／著 新庄 嘉章／訳 若林 真／訳 | 河出書房新社 | 1968 | 908 | セ |
| ★ | 償金つかい | アンドレ・ジッド／著 山内 義雄／訳 | 新潮社 | 1969 | 953 | ジド |
| ★ | 背徳者 (岩波文庫) | アンドレ・ジッド／著 川口 篤／訳 | 岩波書店 | 1971 | 953 | ジド |
| ★ | 女の学校・ロベール (新潮文庫) | アンドレ・ジッド／著 新庄 嘉章／訳 | 新潮社 | 1972 | 953 | ジド |
| | 筑摩世界文学大系 55 ジッド モーリヤック | ジッド／著 モーリヤック／著 川口 篤[ほか]／訳 | 筑摩書房 | 1975 | 908 | チ |
| | ノーベル賞文学全集 10 アンドレ・ジッド フランソワ・モーリヤック | アンドレ・ジッド／著 フランソワ・モーリヤック／著 | 主婦の友社 | 1978 | 908 | ノ |
| ★ | 狭き門 改版(新潮文庫) | ジッド／著 山内 義雄／訳 | 新潮社 | 1989 | 953 | ジド |
| ★ | 未完の告白 (新潮文庫) | ジッド／著 新庄 嘉章／訳 | 新潮社 | 1989 | 953 | ジド |
| ★ | モンテーニュ論 (岩波文庫) | アンドレ・ジッド／著 渡辺 一夫／訳 | 岩波書店 | 1990 | 950.2 | モ |
| ★ | ジッドの日記 1 1889～1911 | ジッド／著 新庄 嘉章／訳 | 小沢書店 | 1992 | 955 | ジ |
| | 世界の文学セレクション36 23 ジッド モーリアック | ジッド／著 モーリアック／著 渡辺 一民[ほか]／訳 | 中央公論社 | 1994 | 908 | セ |
| ★ | ジッドの日記 2 1912～1920 | ジッド／著 新庄 嘉章／訳 | 小沢書店 | 1999 | 955 | ジ |
| ★ | ジッドの日記 3 1921～1930 | ジッド／著 新庄 嘉章／訳 | 小沢書店 | 1999 | 955 | ジ |
| ★ | 田園交響楽 改版(新潮文庫) | ジッド／著 神西 清／訳 | 新潮社 | 2005 | 953 | ジド |
| ★ | シヨパンについての覚え書き | アンドレ・ジッド／著 中野 真帆子／訳 | シヨパン | 2006 | 762.3 | シ |

**第14回中野区ゆかりの著作者紹介展示
「芹沢光治良 ～中野小滝町に暮らしたエクリバン～」ブックリスト**

川端康成

| 展示 | 書名 | 著者名 | 出版者名 | 出版年 | 請求記号 | 禁帯 |
|----|--------------------|--------------|---------|------|---------|----|
| ★ | 川端康成選集 全10巻 | 川端 康成／著 | 新潮社 | 1956 | 918.68 | カワ |
| ★ | 新潮日本文学 15 川端康成集 | 川端 康成／著 | 新潮社 | 1968 | 918.6 | シ |
| | 小説の研究 (講談社学術文庫) | 川端 康成／著 | 講談社 | 1978 | 901.3 | カ |
| ★ | 新潮現代文学 1 川端康成 | 川端 康成／著 | 新潮社 | 1979 | 913.68 | シ |
| | 川端康成全集 第30巻 | 川端 康成／著 | 新潮社 | 1982 | 918.68 | カワ |
| | 川端康成全集 第31巻 | 川端 康成／著 | 新潮社 | 1982 | 918.68 | カワ |
| | 新潮日本文学アルバム 16 川端康成 | | 新潮社 | 1984 | 910.26 | シ |
| | 川端康成 | 田久保 英夫〔ほか〕／著 | 小学館 | 1991 | 910.268 | カワ |
| ★ | 舞姫 改版(新潮文庫) | 川端 康成／著 | 新潮社 | 1991 | 913.6 | カワ |
| | 日本幻想文学集成 20 川端康成 | 川端 康成／著 | 国書刊行会 | 1993 | 918.6 | ニ |
| ★ | 伊豆の踊子 改版(新潮文庫) | 川端 康成／著 | 新潮社 | 2003 | 913.6 | カワ |
| ★ | 現代日本文学アルバム 8 川端康成 | 川端 康成〔ほか〕／監修 | 学研 | 2004 | 910.26 | ゲ |
| | 川端康成 美しい日本の私 | 大久保 喬樹／著 | ミネルヴァ書房 | 2004 | 910.268 | カワ |
| ★ | 川端康成 甞められた日本の美 | 羽鳥 徹哉／監修 | 平凡社 | 2009 | 910.268 | カワ |

大江健三郎

| 展示 | 書名 | 著者名 | 出版者名 | 出版年 | 請求記号 | 禁帯 |
|----|--------------------------|---------------|-----------|---------|---------|----|
| ★ | 大江健三郎全作品 全6巻 | 大江 健三郎／著 | 新潮社 | 1966-67 | 918.68 | オオ |
| ★ | 日本の文学 76 石原慎太郎 開高健 大江健三郎 | 大江 健三郎〔ほか〕／著 | 中央公論社 | 1968 | 918.6 | ニ |
| ★ | 大江健三郎全作品 第二期 全6巻 | 大江 健三郎／著 | 新潮社 | 1977-78 | 918.68 | オオ |
| ★ | 新潮日本文学 64 大江健三郎集 | 大江 健三郎／著 | 新潮社 | 1979 | 918.6 | シ |
| ★ | 同時代ゲーム | 大江 健三郎／著 | 新潮社 | 1979 | 913.6 | オオ |
| ★ | 新しい人よ眼ざめよ | 大江 健三郎／著 | 講談社 | 1983 | 913.6 | オオ |
| ★ | 河馬に噛まれる | 大江 健三郎／著 | 文芸春秋 | 1985 | 914.6 | オオ |
| ★ | 大江健三郎の世界 | 一条 孝夫／著 | 和泉書院 | 1985 | 910.268 | オオ |
| ★ | 大江健三郎小説 全10巻 | 大江 健三郎／著 | 新潮社 | 1996-97 | 913.68 | オオ |
| | よくわかる大江健三郎 | 文芸研究プロジェクト／編著 | ジャパン・ミックス | 1998 | 910.268 | オオ |
| ★ | 日本文学全集 22 大江健三郎 | 大江 健三郎／著 | 河出書房新社 | 918 | ニ | |

林芙美子

| 展示 | 書名 | 著者名 | 出版者名 | 出版年 | 請求記号 | 禁帯 |
|----|-----------------------|--------------|----------|------|---------|----|
| ★ | 日本の文学 47 林芙美子 | 林 芙美子／著 | 中央公論社 | 1964 | 918.6 | ニ |
| | 林芙美子全集 全16巻 | 林 芙美子／著 | 文泉堂出版 | 1977 | 918.68 | ハヤ |
| ★ | 新潮日本文学 22 林芙美子集 | 林 芙美子／著 | 新潮社 | 1979 | 918.6 | シ |
| ★ | 林芙美子詩集 | 林 芙美子／著 | 思潮社 | 1984 | 911.56 | ハ |
| ★ | 新潮日本文学アルバム 34 林芙美子 | | 新潮社 | 1986 | 910.26 | シ |
| ★ | 清貧の書・屋根裏の椅子 (講談社文芸文庫) | 林 芙美子／著 | 講談社 | 1993 | 913.6 | ハヤ |
| ★ | 作家の自伝 17 林芙美子 | 佐伯 彰一〔ほか〕／監修 | 日本図書センター | 1994 | 910.26 | サ |
| ★ | 絵本猿飛佐助 | 林 芙美子／著 | 講談社 | 1996 | 913.6 | ハヤ |
| ★ | 林芙美子巴里の恋 | 林 芙美子／著 | 中央公論新社 | 2001 | 915.6 | ハヤ |
| ★ | 下駄で歩いた巴里 (岩波文庫) | 林 芙美子／著 | 岩波書店 | 2003 | 915.6 | ハヤ |
| ★ | 現代日本文学アルバム 13 林芙美子 | 川端 康成〔ほか〕／監修 | 学研 | 2004 | 910.26 | ゲ |
| ★ | 林芙美子 総特集 恋と宿命の“放浪紀” | | 河出書房新社 | 2004 | 910.268 | ハヤ |
| | ひとつの文壇史 (講談社文芸文庫) | 和田 芳恵／著 | 講談社 | 2008 | 910.26 | ワ |
| ★ | 林芙美子女のひとり旅 | 林 芙美子／著 | 新潮社 | 2010 | 910.268 | ハヤ |
| ★ | 甞る放浪記 復元版覚え帖 | 廣畑 研二／著 | 論創社 | 2013 | 913.6 | ハヤ |

三岸節子

| 展示 | 書名 | 著者名 | 出版者名 | 出版年 | 請求記号 | 禁帯 |
|----|-----------------|----------|----------|------|--------|----|
| ★ | 日本の名随筆 7 色 | 大岡 信／編 | 作品社 | 1984 | 914.68 | ニ |
| ★ | 日本の名随筆 23 画 | 東山 魁夷／編 | 作品社 | 1988 | 914.68 | ニ |
| ★ | 日本の名随筆 71 恩 | 高田 好胤／編 | 作品社 | 1988 | 914.68 | ニ |
| ★ | 日本の名随筆 81 友 | 安岡 章太郎／編 | 作品社 | 1989 | 914.68 | ニ |
| ★ | 美神の翼 | 三岸 節子／著 | 求竜堂 | 1991 | 720.4 | ミ |
| ★ | 花より花らしく (ちくま文庫) | 三岸 節子／著 | 筑摩書房 | 1991 | 720.4 | ミ |
| ★ | 三岸節子華 | 三岸 節子／著 | 求竜堂 | 1998 | 723.1 | ミ |
| ★ | 炎の画家三岸節子 | 吉武 輝子／著 | 文芸春秋 | 1999 | 723.1 | ミ |
| ★ | 好太郎と節子 宿縁のふたり | 澤地 久枝／著 | 日本放送出版協会 | 2005 | 723.1 | ミ |

阿部光子

| 展示 | 書名 | 著者名 | 出版者名 | 出版年 | 請求記号 | 禁帯 |
|----|------------------|-------------|--------|------|--------|----|
| | 現代日本キリスト教文学全集 6 | 阿部 光子〔ほか〕／著 | 教文館 | 1973 | 918.6 | ゲ |
| ★ | 現代の女流文学 4 | 女流文学者会／編 | 毎日新聞社 | 1974 | 913.6 | ゲン |
| ★ | 老いたるシンデレラ | 阿部 光子／著 | 新潮社 | 1981 | 913.6 | アベ |
| ★ | 『或る女』の生涯 | 阿部 光子／著 | 新潮社 | 1982 | 913.6 | アベ |
| ★ | 阿部光子の更級日記／堤中納言物語 | 阿部 光子／〔訳〕著 | 集英社 | 1986 | 915.36 | ア |
| | 自立した女の栄光 (講談社文庫) | 瀬戸内 晴美／編 | 講談社 | 1989 | 281 | ジ |
| ★ | その微笑の中に | 阿部 光子／著 | 新潮社 | 1992 | 913.6 | アベ |
| ★ | 文学 1992 | 日本文藝家協会／編 | 講談社 | 1992 | 913.68 | ブ |
| | 細川ガラシャのすべて | 上総 英郎／編 | 新人物往来社 | 1994 | 289.1 | ホ |

第14回中野区ゆかりの著作者紹介展示
「芹沢光治良 ～中野小滝町に暮らしたエクリバン～」ブックリスト

中村真一郎

| 展示 | 書名 | 著者名 | 出版者名 | 出版年 | 請求記号 | 禁帯 |
|----|--------------------------|--------------|-------|------|--------|----|
| | 日本の文学 72 中村真一郎 福永武彦 遠藤周作 | 中村 真一郎[ほか]／著 | 中央公論社 | 1969 | 918.6 | ニ |
| ★ | 頼山陽とその時代 | 中村 真一郎／著 | 中央公論社 | 1971 | 919.5 | ナ |
| | 建礼門院右京大夫（日本詩人選） | 中村 真一郎／著 | 筑摩書房 | 1972 | 911 | ニ |
| ★ | 永遠のなかの竜 | 中村 真一郎／著 | 新潮社 | 1976 | 913.6 | ナカ |
| | 雲のゆき来 | 中村 真一郎／著 | 筑摩書房 | 1977 | 913.6 | ナカ |
| ★ | 夏 | 中村 真一郎／著 | 新潮社 | 1978 | 913.6 | ナカ |
| ★ | 新潮現代文学 30 中村真一郎 | 中村 真一郎／著 | 新潮社 | 1980 | 913.68 | シ |
| ★ | 秋 | 中村 真一郎／著 | 新潮社 | 1981 | 913.6 | ナカ |
| ★ | 日本古典にみる性と愛 | 中村 真一郎／著 | 新潮社 | 1983 | 910.2 | ナ |
| ★ | 四季 | 中村 真一郎／著 | 新潮社 | 1985 | 913.6 | ナカ |
| ★ | 冬 | 中村 真一郎／著 | 新潮社 | 1985 | 913.6 | ナカ |
| ★ | この百年の小説 人生と文学と | 中村 真一郎／著 | 新潮社 | 1988 | 910.26 | ナ |
| ★ | 蠣崎波響の生涯 | 中村 真一郎／著 | 新潮社 | 1989 | 913.6 | ナカ |
| | 中村真一郎小説集成 第1巻 | 中村 真一郎／著 | 新潮社 | 1992 | 913.68 | ナカ |
| ★ | 私のフランス | 中村 真一郎／著 | 新潮社 | 1997 | 914.6 | ナカ |
| | 全ての人は過ぎて行く | 中村 真一郎／著 | 新潮社 | 1998 | 914.6 | ナカ |
| ★ | 木村兼葎堂のサロン | 中村 真一郎／著 | 新潮社 | 2000 | 289.1 | キ |

資料協力 (敬称略)

岡 玲子

沼津市芹沢光治良記念館

芹沢光治良文学愛好会 鈴木 春雄

中野区立第三中学校 芹沢光治良記念文庫

中野区政策室広報分野

中野区立中央図書館企画 第 14 回中野区ゆかりの著作者紹介展示

芹沢光治良

—中野小滝町に暮らしたエクリバン—

発行年月日 2018年3月30日

編集・発行 中野区立中央図書館

印刷番号 29指中教図中第381号

所在地 〒164-0001 東京都中野区中野2丁目9番7号

TEL 03-5340-5070 FAX 03-5340-5090



中野区立図書館

<http://www3.city.tokyo-nakano.lg.jp/tosho/>